

土 淨

號 月 九

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月二回一日發行）
昭和十七年八月廿日印刷納本・昭和十七年九月二日發行

第八卷 第九號



金

陸海軍 病院

慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願ひ致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◇一口一圓五十錢の淨財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◇毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◇御送金は浄土宗務所専變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

中村辨康著

日常勤行式講讀

信仰の入門書！

座右に備へて日常

勤行の深意を味得

し、以て各自の修養に最適です！

毎日お勤めをするお經文の一人に懇切な解説がついてゐます。即ちお經文に和譯と意譯をあげて字解までつけ信仰の深底を縷々述べられてゐます。

誰にてもよく判る佛教書！

一讀して信仰の何たるかを解し得る絶好の書です。

B 6 版二百四十頁
價 一圓五十錢
送料 十二錢

著 夫 幹 本 山

想思體國がわと教佛然法

わが國體思想からみた

法然佛教の新しい基礎づけ

神國日本の教法として開創された

法然佛教を歴史的に解明した時局

下必讀の書！

日本佛教の發展が法然佛教に到つ

て初めて萬民翼賛の教法として現

れ大成されるまでを總ゆる資料に

より解明されてゐる。

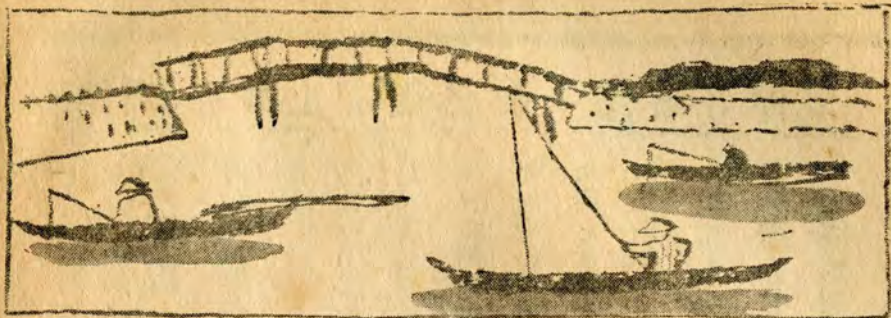
わが國ならではと思はしめる新宗

の開創の根源

を説いて餘り

なし。

A 5 型クロース装
價 二圓二十錢
送料 十五錢



浄土九月號 目次

表紙・扉・目次カツト……………鈴木金平

浄土教と日常生活……………故渡邊海旭(四)

蓮を觀る會……………池田立基(六)

山莊の記……………吉田絃二郎(一四)

謠曲の月光浄土……………松本龜松(一八)

前線銃後
實話美談

上原一等兵の死……………野須喧雄(二四)
心の石碑……………山下晋郎(二四)

義經と捨て子……………(一〇)
魚母念子……………(三)
信ずること……………(一〇)
この世のお客……………(三)

盟邦泰國の風景……………二見梅子(八)

▼信仰相談……………中村辨康(四)

浄土隣組座談會……………編輯部(四)

歌俳壇……………岩野喜久代選(三)
漫畫壇……………太田耳動子選(五)
漫畫北・内地・南……………漫畫協團(四)
北京の孤兒院……………(六)
これは便利……………(三)

法語解説 無量壽こそ最高價值……………中村辨康(五)

編輯後記……………(五)



淨土 九月號

おほかたは世間も出世も、道理は
たがはぬ事にて候也。

悪人をもすて給はぬ本願ときかん
にも、まして善人をばいかにかりか
よろこび給はんと思ふべき也。

法然上人御法語





淨土教と日常生活

故 渡 邊 海 旭 講述

佐々木利正記

佛教の大道はといふと、何ものにも偏しない中庸といふことと、正道をその本領としてゐる。この正道の内にあつても特に正命を重要視してゐる。そして更に正命の根本はといふと、それは正見である。従つて淨土教にあつても勿論のことこの正命、正見を具現しなければならぬ。ここにわれわれの自己の存在が展開されてくる。即ち小にしてはわれわれの家庭、大にしては國家、更にまた世界人としての存在が展開される。

次に淨土宗の根本は何かといへば、それは彌陀の救ひのもとにあつて日に活躍を續けてゆくことであるし、また一方には因果の理法を信するといふことでもある。法然上人はしばしばこのことを説かれてをられるのであつて、彌陀の救ひといふことにだけ重きを置くといふやうしても自己の

行動を反省しなくなる傾向が生じ易いものであるから、深く本願を信じ、兼ねて因果を信すること、即ち善因善果、惡因惡果についてお説きになつてゐる。

この内で淨土教では深信本願の方はいはうまく實行されるのではあるが、何うも兼信因果の方の實行が不確實になり易いのであつて、これではいけないのである。何故ならば、萬善萬行を集積したものが彌陀であるが故に、われ／＼も善因善果を信じなければならぬ。宇宙のありとあらゆるものは因果律から免れることが出来ないものである。カントの墓石に「天に星辰輝き心に道德あり」と刻まれてゐる。また馬琴などはその著述に因果應報の主旨を強調してゐる。われわれの處世上にも因果を信することは大切である。近來この因果の考へが段々と薄くなりつゝあるが、少なく

ともわれく、淨土教徒は素直な心を以て本願を信じ、彌陀の救ひを信する一方には飽くまで因果の理法を信じ、そして人間らしい生活を営むやう努力してゆかなくてはならぬ。若しもわれわれの行動の内に自己主義のやうに自分だけのことしか考へずには他は何うなつても構はないと云つた行爲があるやうでは全く不可ぬ。

淨土教を信すると、世間のいろ／＼の惡を認め、これを厭ふやうになる。このために自然と悲觀的に傾いたり、隠遁したいといふ氣分になるといふ人があつて、この陰鬱な傾向を帯びて來るのがいやで宗教を信仰しないといふ人があるやうである。しかし宗教は決してさやうなものではないのである。又逆に樂天主義は上調子になり勝ちで、日々の快樂を追ひ、國家のことは勿論のこと自己のことさへ考へないものが出て來るが、これは誠に遺憾なことである。人間は底力のある眞の快樂を把持しなければならぬが、宗教はこの眞の快樂、即ち歡喜を教ふるものなのである。宗教を信仰しない人達の欲求する快樂は、多くは一時的のもので、恰もアヘン、アルコール、モルヒネ等の常用者がこれに酔つてゐる間は機嫌がよくて樂しさうでも、一度酔ひから醒めると不愉快と苦痛に悩むやうなものである。從

つてかやうな淺劣な快樂は結局苦痛を買ひつゝあるに過ぎないのである。これに反して宗教は心からの喜び、深い喜びを持ち得るものであつて、若しそれ淺薄な快樂を追ふものの多い國家は遂に滅亡に赴くの外はないのである。飲酒の快を貪る連中は、飲んでゐる仲間だけはなるほど愉快なのかも知れないが、傍にゐる人にとつては甚だ迷惑の上もないことである。

淨土教の信者は徒らに社會を厭ひ悲觀してゐる者ではない。法然上人は御一生の間に波瀾が多く、いろ／＼な境涯にその身をおかれたのであつたが、それに拘らず少しも心を動搖させるやうなことがなく、常に歡喜に浸りながら生涯を送られた。阿彌陀佛には十二光佛の稱があり、その中で歡喜光佛と申すのは人をして歡喜せしむるの光りである。この光りに遇ふものは三垢消滅し、身も心ともに柔軟となり、踊躍する程の喜びとなる。淨土教はかく歡喜踊躍して善心を生ぜしむる教へであつて、小消息にも「天を仰ぎ地に俯して喜ぶべし」と申されてゐるのはこのことなのである。更に又かくの如く自らが歡喜踊躍するばかりでなく、これを他にも頒つといふ心掛けが必要なのであつて人々が相喜び相助けてゆくことが即ち淨土を建立する所以

である。これに反して若し怨や咒ひや復讐心などを持つて世に處したとしたならば、實にこの世は陰慘な不愉快な人生となる。今の青年の求むる歡樂の多くは、それに没ることの多きに從つて、ますます苦痛を増すのみであることを強く反省しなければならぬ。

淨土の信仰を堅持すれば、自己や自己の周囲のみの歡喜に止まらず、敵に對してすら同情を持つことが出来るやうになる。法然上人に對して當時の天台宗の僧侶たちはしばしば上書して念佛を禁止せられんことを高唱し、また上人の弟子の間に亂行者があつたりしたため、遂に上人は藤井元彦といふ俗名に改められた上で流罪に處せられた。普通ならば罪のないのに流罪の刑になつたのだから、抗議を申し立て、もよささうに思へるが、さやうなこともせず、また一時念佛を中止せられるやうにとある弟子のすゝめを却け、流罪のため容易に行くことの出来ない四國に念佛を擴むる機縁を得たことはすこぶる朝恩なり」と申された。われ／＼もこのやうな高遠な考へを持ちたいものである。われわれの日常生活には種々の困難や誘惑に遇ふのであるから、これを機として自己の反省に資するといふやうに心掛けたいものである。即ち逆縁を喜ぶの境地にまで達した

いものである。ところがこの心は本願を信することによつて湧起せしめ得るのである。蓮月尼がかつて旅行中のこと、ある所で宿泊を依頼して斷られてしまつたことがあるが、その時に、「宿かさぬ心なき人の情にて臘月夜の花の下かげ」と詠じたのは、まあ多少は負け惜しみや誇張はあるにしても、心掛け次第によつてはかくなり得るものであることが判るであらう。

北京の孤兒院

北京に有名な孤兒院が二つある。その一つは北京育嬰堂であり、他は龍泉孤兒院が即ちこれである。北京育嬰堂は民國六年に陳遇春が設立され、この孤兒院は主として不幸な棄子を收容し、救済保育につとめてゐる。そして棄子を收容するために「濟生園」と稱する高さ二尺、幅三尺位の観音開きの扉がある本箱を道路に面した壁に嵌設し、更にその中には搖籃のやうな藤製の小ベツトが設けてある。嬰兒をその中に置くと底部の電流裝置によつて自然とそのベツトが事務室に返るやうになつてゐる。従つて隨時に無造作にしかも完全に棄子が出来るやうな設備になつてゐるわけである。尤も餘りこの種の設備が利用されるのは感心しない支那社會の悲しい現實であるが、目下百五十名の嬰兒が收容されてゐる。收容された嬰兒は適當な食物が與へられ、三歳になれば幼稚園に六歳には小學校に送られ、

更に進んで日常生活について考へてみるに、實際はいろいろの雜務に累せられて常に宗教心を持つことが仲々出来難いものである。何うしても宗教は宗教、家業は家業といふやうに別々なものとなり勝であるが、しかし淨土教徒はこの二元主義を排すべきである。法然上人は弟子の間に對して「生活のためには何をして構はぬ。ただ念佛の助業として因果の理法に背かぬ業をなせばよい」と教へられてゐる。われわれは深い意識のもとに業務に従事し、生活を營めばよいのである。こゝに大なる精神も生れる。この信仰心の増上につれ大なる安心を得て、歡喜して世に處することが出来ると同時に、その反面には反省懺悔することゝ報恩の心掛けがあることが必要である。小消息に「行住坐臥にも報すべし」とあるやうに、この心掛けによつて何物にも報恩の念が起つて来る。四恩即ち國家、社會、家庭、如來に對する大恩を覺知し、報恩の心を持つならば、社會全般の狀態も大いに改まるであらう。單に與へられたものに對してのみならず、積極的に他を救済することも大なる報恩である。われわれ淨土教信者は念佛にて一切の業務に精勵し他を救済して、社會的に益々有意義の生活を向上するやうに心掛けることが肝要である。

中でも成績良好のものには中學校にまで入れて教育してゐる。

×

また龍泉孤兒院は光緒三十二年

(明治三十九年)に心學、道興兩和尚によりすでに三千餘の孤兒を社會に送り、中には社會で相當活動してゐる者もある。現在六十餘

名の孤兒を收容してゐるが、充實した内容と設備で知られてゐる。

即ち孤兒のためそれに必要な一切の設備が整つてゐる。このやうに小學校教育と簡易な技術の習得が出来る外に、軍樂と古樂の訓練も

特筆すべきものである。軍樂は即ち現代の軍樂であり、古樂は中國の堯舜時代に源を發する中國古樂である。

この古樂は堯舜から夏、殷、周三代に隆盛となり、秦の始皇の焚書によつて一度衰へはしたものの、唐の時代に再び復興された。尤も實際上には唐以後に於ける中國古樂は漢胡混合したものである。

從つて同院の古樂は純粹な中國古樂とは云はれないが、中國古樂の祕は充分に傳へてをり、かつまた北京唯一の古樂隊でもある。

東亞人の東亞といふことが力強く叫ばれる現代に於て中國古樂の傳統を守りつづけてゐるたつた一つの古樂隊の存在は決して看過することの出来ない意義をもつてゐる。

北京での春秋二度の孔子祭には、この孤兒達が特別な服裝をしてこの古樂を奏し、それに合せて古式の舞踊を奉仕するのである。

(文學博士山口察常氏)



邦盟 泰國の風景

街を埋める黄衣の僧たち

特命全權公使
二見氏夫人

二 見 梅 子

昭和十六年三月のこと、泰國に行くことゝなつて、この時何んとなく十分開けてゐない國にでも行くやうに考へてゐたものです。何かの寫眞で見た印象が残つてゐて、街の中に巨象がそのそ歩き廻つてゐるかも知れない位に思つてゐたのですからお話になりません。ところが實地に泰國に行き、バンコックの街を見て驚いてしまひました。

盟邦泰國は大東亞共榮圈建設の有力な一員としてわが國ときつてもきれぬ關係にあることは申すまでもありません。今から思ふとほんとお恥しい次第ですが、僅か一年半前の

街の路面は全部コンクリートで舗装され、その上を最新式の自動車や澤山に疾驅してゐました。うつ蒼と茂つた街路樹が路の兩側から覆ひかぶさつてきてゐます。この緑のトンネルの中央に一直線にズラリ電燈がつけてあ

つて、夕方になるとこの電燈が輝いて實に美しいし、また涼しいのでよい氣持がします。鐵道は國際列車でかなりぜい澤です。車内は冷房裝置でほんとに涼しいし、専用の食堂がついてゐるし、長旅をしても少しも苦にならないやうになつてゐます。車窓から見る泰國の景色は内地のやうに變化はないが、この國獨特ののどかさがあります。見渡す限り大平野で、見事に耕された田が限りなく連つてゐます。その中に白さが點々として見え、また水牛がゆつくりと田を耕してゐます。一年を二季に分けて雨季と乾季とがあります。五月から十月一杯が雨季に當り、この間

は毎日一回猛烈な雨が降ります。この雨は丁度夕立のやうな降り方であつて、一時間か一時間半位で止んでしまひます。だから途中で雨にあつてもしばらく家の軒下か樹の下に休んでゐればよいし、たとへ雨に濡れてもすぐ乾いてしまふので傘を持つたり帽子をかぶる必要がないのです。ビブ首相が生活改善の一つとして帽子をかぶれ、靴をはくと一般に違ひてゐるが、永年の習慣は容易に改まり難いとみへて帽子や傘を持たずに跣で歩く人がまだ多くゐます。尤もはいいから人は日傘をさしてゐます。

この雨季の始まる五、六月頃に稻を植へます。植へてしまへば後は何もしないで放置しておけば秋までに立派に實つて刈入れが出来ます。米は安いし肉は豊富にあります。殊に果實はバナナ、ジャボン、マンダスチン、マシゴ、ドリヤン等といくらでもあり、とても大きなパイヤがあつて、一年中果實のない時はありません。そして何れも甘みが強い

のは乾季に全く雨がないたためでせう。この果實の美味しい味は忘れることの出来ないものです。ただ不足してゐるのは野菜であつて、玉ねぎ、馬鈴薯、人参等は日本から輸入してゐました。

田舎にゆくと日本の蘆ふきの家と實によく似た民家があります。家の周りに竹藪が茂つてゐたりするとほんとに日本の田舎といった感じがします。この竹は一本の竹から澤山の枝が出て茂るところが日本の竹と違つてゐます。バンコックは運河が發達してゐて、以前は一寸買物に行くにも舟で行つたものでせう。だから家もこの運河の方に向いて建てられてゐます。建築にチーク材を使用してゐるのも、この用材が豊富であるのと、運河にそつて建てるためにチークが必要なのでせう。

x

近頃南方ボケなどといふ言葉が出来て、南方の暑さになれるまで骨が折れるといふ意味でせうが、この國の暑さも相當酷いもので

す。家の各部屋は何れも廣く出来てゐて、大きい扇風機が廻つてゐるものの暑い風を送つてくるので餘り涼しいものでありません。シヤワーにかゝるのがよいのですが、それでも鐵管がやけてゐて熱いやうな水が出てきます。五月中頃までが一番暑いので、學校の暑中休暇は四月になつてゐます。自動車に乗つても車の屋根がやけてゐるので帽子をとると暑いので車中でもヘルメットをかぶつてゐます。夜海岸通りに行つてみるとコンクリートの上に寝たり、または家から長椅子を持ち出してその上で寝てゐる人が澤山にゐます。しかし朝は八時頃までと、夕方は日没後が大變にしのぎ易いのであつて、暑くて夜睡れぬやうなことはまづありません。尤も風の無い夜はビツシヨリ汗をかくこともあります。

運河の多いのと大きな家には池のやうな水溜りがあるので蚊がとて多いのです。蚊取線香などは受付けられない位にゐるのですが、土地の人々は蚊に對して一向平氣です。

x

さて泰國にきて誰でも目につくのは佛教國としての風習と華僑の持つてゐる力とでせう。毎朝五時頃に街に出てみると黄衣の僧たちがさんさんご歩いてゐて、街中は黄衣一色にぬりつぶされ實にきれいなものです。この僧たちは托鉢に廻つてゐるのです。一方普通の家ではこの時分までに準備を整へて托鉢僧を待ちうけてゐます。どの家でもみな門のところに銀の鉢にご飯を盛り、木の葉でつくんだつみみを積み上げて用意してあります。家の前に僧がくると、一匙の飯と一つのつみみを僧に捧げます。これを僧が鉢に受けて立ち去つてゆくと、いま捧げた人は僧の後姿に向つて合掌します。この國での挨拶は合掌です。頭を下げたり手を握つたりするのでなくて相手に向つて合掌をするのです。身分の上の人に對しては兩手を胸の邊まで高くあげて合掌をします。若い婦人達がお互に合掌し合つてゐるのを見ると、いかにもやさしいよい感じ

がするものであります。

男が成年になると必ず一度は僧籍に入つて三ヶ月か半歳或ひは一年位は修行をします。この修行中の入道が毎朝托鉢に出るわけで、僧たちの食事は午前中だけしかとりません。午後には水を飲むだけで食事はしません。男としてこの僧の修行をしないとその者は社會に出てから信用されないから結局一人前になれぬわけであります。

バンコックだけでも寺院の数が四百位あります。せうか。その中でも王城内のワットプラケオが一番立派で黄金に輝いてゐます。ここには二尺五寸のエメラルド佛像があるのが有名です。この佛像は一丈位の壇上にあり黒づんだ色をしてゐます。又黄金の佛像が三體あつて何れも六十斤の金を使用した時價百萬圓以上のものだと云つてゐます。床には伊太利から取りよせた大理石が引きつめられ、壁には金泥極彩色の釋迦像が描かれてあつて目を奪ふばかりの華麗さです。長い廻廊が幾つもあ

▽義經と捨て子△

源の義經は勇將を以て知られ、すべて厳しく取扱つた人といはれてゐるが、しかし一面には情にもろい大將でもあつた。

元暦元年二月三日義經は兵一萬餘騎をつれて丹後播磨の境なる三草山に陣をとつた。その時誰か道案内があるいかと附近に人を求めたが、源氏の太軍が推しよせてきたと聞いた里人達はすでに悉く逃げてしまひ人影一つ見えなかつた。

折から義經が二十騎餘りをつれてゆくと、一人の女が多分逃げ遅れたのであらう幼兒二人を背と腋に抱へて山道を走つて行つた。近侍の者がそれを見つけてすぐ女を追ひかけた。すると女はこれに驚き怖れて腕に抱へてゐた子供を捨て、逃げ去らうとした。

やがて武士たちに捕へられた女の所に義經が進みよつて、

「何故に自分が子供を捨て去つて自分だけが逃げようとしたか。見受けるころ背におぶつ



つて、それにまた種々の傳説を物語る壁畫があり、菩提樹の葉の型をした風鈴が風に吹かれて妙音を響かせてゐる風景は印象的なもの

すが、晝間この病院に野良犬にかまれた患者が必ず毎日二、三十人は來ることでも如何に野良犬が多いか判ります。矢張りこの病院に

です。その他に有名な寺院としてはワットベンチャマボピットに澤山の釋迦像があり、ワットボールに釋迦横臥像があります。この像はかつては全身に金箔を以て莊嚴されてゐたものが、今は頭と足の裏にだけ名残の金箔をみるゝことが出来ます。

×

街を歩くとどこにも野良犬がゐて驚くばかり澤山にゐます。この犬は毎朝鉢がすむと各家々で残つたご飯を食べてゐるのです。蛇病院と呼ばれる立派な病院があつて、キングコブラといふ一匹の毒

で人間百人を倒すといふ毒蛇やその他の蛇を大池にかつてゐるので

てゐるのは兄であつて捨て去つた方の子供は弟であらう。如何なるわけで兄の方だけ助けるのであるか。弟の方が年下であるから尙のこと不びんでないか。」

と質ねた。するとその女は答へていつた。

「お質ねのお言葉はなるほど御尤もで御座います。しかし今捨てました子供は妾の實子で御座います。そして連れて一緒に逃げようとした方の子供は義理ある兄の子で御座います。この子はすでに両親もなく妾の手で養育してゐる頼り少い甥なので何うしても捨てられません。ところが實子の方はまたも持つことが出来やうかと考へ、悲しいながら捨て、逃げました。」

義經は女の申し立てに成程と感じ入り、いろいろ身の素性を聞いて宿所まで送りつけさせた。その後この女の貞烈を賞する意味で女の兄に當る舊尾三郎經春を呼びだし、家來にした。後に經春は一の谷屋島壇浦に功をたて、義經奥羽に逃れた時にも一緒にとををして行つた家來の一人となつた。

夜になると蛇にかまれに患者がきますが毎夜四、五人しかきません。

また泰人のマスコットになつてゐるものでトツケイといふのがゐます。これはやもりを大きくしたやうなもので一尺五寸位はあります。見慣れぬ者には何うも氣味の悪い姿をしてゐますが、泰人からは大變可愛がられてゐて、家の中でも額の裏側等にゾロ／＼歩いてゐます。乾季になるとトツケイと鳴くのでこの名があるわけで、これが七つ以上の奇數だけ鳴くと必ず幸運がくるといはれてゐます。またトツケイの聲がしやがれてゐれば、近く雨になると云ふので、天氣豫報係を務めてゐるわけでもあります。

泰國には華僑の數が實に多くて、街を歩いてゐると泰人が華僑が一寸區別のつかぬ位によく似てゐるのであるが、この華僑がこの國の經濟上に動かし難い力を持つてゐます。例へば大きな商家は殆んど華僑で占められてゐ

るといふわけです。この華僑はかつては抗日に狂奔したり、援蔣に力を注いだりしたことは御承知の通りですが、今ではかゝる分子は逃げてしまつて、東亞民族として目覺めて轉向したもののばかりです。政府としても華僑に對しいろいろな方策を講じてゐるやうです。例へば華僑の入國税に二百バーツを課すとか、支那小學校を閉鎖したり、漢字紙の發行を停止させるとか、銀行の營業をとめたりしてゐます。その外特定の事業や職業に華僑のたずさわるのを禁止してゐます。過日日本との間に二億圓の借款が成立して日本が泰國の經濟力強化に力をかすことになりましたが、何れ將來は經濟的にも發展するでせう。

又華僑に較べて泰人の體格が劣つてゐるやうです。便利な交通機關にサヌロと人力車とがあるが、人力車の車夫には支那人がなつてゐます。サヌロといふのは近頃内地にもある國民車に似たもので自轉車の後に二人乗りか三人乗りの車をつけて走る車で、これは人力

これは便利！

萬年筆

萬年筆は使ふ人によつてペン先にくせが出來ます。だから使ひ込めばそれだけ使ひよいわけですが、萬年筆の借り貸しは使ひ難くするばかりでなく萬年筆を早くいためることになります。

國扇

うちはの古くなつたものは一晩水につけておけばきれいに紙がとれます。この骨だけのうちはに模様の紙をはると趣味の豊かなうちはが出來ます。

パン粉

食パンの古く固くなつたものを集めておいて日に干し、おろし金でおろすか、すりばちですれば輕くてよいパン粉になります。

またパン粉がなくてフライを作るのにこまる時にはやきふ(燒餅)をほうろく(焙烙)でいり、あらくつぶすとパン粉の代用品になり

車より前に少い力で走るため支那人には營業させずに泰人だけに營業を許可してゐます。

これ等も體力の弱い泰人を保護してゐるわけです。こんな人々を見慣れてゐて、たまたま皇軍の堂々たる勇姿を見かけると如何にもブンギリした力強いものしさを感ずるのであります。

これも華僑の經營によるものであるが實に立派で繁昌してゐる映畫館があります。ここは冷房装置が完備してゐるので、暑い日中は涼みに入る人も可成り多いのであるが、この入場料は二種に區別され、特等席が約四圓七十錢もするの普通席は僅かに約四十七錢であります。このやうに入場料が十倍も違ふのは泰國に上流と下流の社會はあつても中流階級が非常に少いからであります。水道料金にしても、水道を家の中に引いてゐるのは上流社會であるため、この料金がとても高いのに、下流社會で使用する共同栓は使用料なしの無料であります。

バンコックには日本婦人會があつて九十人の會員がゐました。年二回の懇親會を開いてお互に協力しあつてゐたが、大東亞戰爭が開

始され、バンコックに皇軍を迎へた時の感慨は實に無量といふ外はなく、一生忘れることの出来ない感銘を憶へました。それから後は一切の仕事をなげすめて出来るだけのお手傳ひをさせてもらひました。泰の婦人や支那婦人を澤山に儲つて白衣を縫つたりお菓子の製造に働きました。また名譽の負傷をされた將兵の方の看護をしたり慰問もしました。すぐ目の前で一身を捧げて御奉公してゐる忠勇無比の皇軍がいろいろと苦勞をなさつたり、奮戦したりしてゐる姿を見てゐてはわれ／＼邦人は全くじつとしてはゐられない氣持です。何んでもよい出来ることなら何んでも協力させてもらふつもりで働きました。日本婦人會が會員の數こそ少ないながら皆氣を合せて晝も夜も働きたつたことも今となつては懐しい思ひ出であります。(文責在記者)

ます。

氷 枕

氷枕には氷をなるべく細かくくだいて六分目ぐらゐ入れて下さい。入れたら中の空氣をよくおし出してから口を閉めて下さい。

疊 の 下

疊の表替へをする時、ハترون紙か新聞紙を下にしければ塵やほこりが出ず、湿りやのみに防ぐことが出来ます。床板の上に新聞紙をしき、しゃうのうをまけばのみが防げます。

浴 衣

浴衣を洗つて糊をつけてしまつておくとき、氣のためにカビがはえることがあります。

ス ダ レ

スダレをしまふ時には鹽水を吹き、乾いてから新聞紙を巻きこみ、ハترون紙で包んで乾いた所にしまひます。

籐 椅 子

籐椅子をしまふ時は三十倍のクレゾール石鹼水で拭き、よく乾かしてから新聞紙でつつんでおくといふのです。



山 莊 の 記

吉 田 絃 二 郎

七月三十日 明日は信濃の旅に出るのだと思ふと何となく寂しい氣もしないではない。狗子を連れて近くの多摩川に連れて行き、水に入れてやる。當分は狗子とも遊べないことなどを思ふ。

狗子には主人の心はわからないのであらう。うれしげに水の中を走り、川原に上つては腹這ひになつて吠える。

夜は月が照つてゐた。狗子はわたしが眠つてゐる部屋の下に來ては吠えてゐる。

七月三十一日 朝はいつもより早く起きて犬の食器を洗ひ、狗子に食事を與へ、冷たい水を掬んでやつた明日から當分は冷たい水も朝夕にかへてはもらへないであらう。

家を出る時はわざと狗子の姿を見ないことにした。

八月一日 人間の一生にはいろいろな執心があるものだ。かつては父に母に對して執するところがあつた。今天涯孤獨の身となつては執心のある筈はないが、さうは行かぬ。一疋の狗子であつてもわが執心の種子となる。

佛は人間をして生に執着せしむるために、執心の種子を絶やし給はぬのであらうか。

朝から浅間が見える。こんな日はたいいてい暑い。しかし土地の人たちは冬のセイタアを着てゐる。

沓掛の町まで野菜を購めに山を下るのも億劫である。裏所を探したら去年の醬油がすこし残つてゐたので、微を取り、東京から携へて來た一本の鯉節を削り



米も二升ばかり去年のが残つてゐたので、當分の食糧には事缺かぬ。

山莊に近く終日郭公、雉子鳩、鶯、ほととぎす鳴く。をりくは太瑠璃鳴き、朝夕は水鶏たゝく。

夜は普門品を誦す。

八月二日 朝四時鳥の聲に眼覺む。鶯、瑠璃、四十雀、郭公。

仰臥したるまゝ東京の家のことを思ひ、明日の身を思ふ。

鈴鹿山うき世を外に振り捨てゝ

いかになりゆくわが身なるらん

これは世を捨てゝ都を出で、伊勢路へと志して鈴鹿を越えたをりの西行の歌である。

西行は北面第一の勇士であり、六尺豊かの偉丈夫であつたらしい。その西行も世を捨てゝ一人になれば明日の身の上を案じたものであらう。聖書には「今日は今日にて足れり、明日のことを思ひわづらふ勿れ」と

教へてあるが、西行の心をこれと結びつけて批判することはできない。人と別るゝことは悲しく、明日の身

の上を案ずることも自然である。

捨てがたきを捨てゝこそまことの世捨て人である。

人一倍世を大事に思へばこそ世を捨つるのである。

別れても悲しくない浮き世なら捨てたとして何の甲斐

があらう。命が惜しくないといふのも眞ではない。惜しい命を惜し氣もなく捨てゝこそ尊くもある。

死ぬといふことを考へると寂しい。それが人情である。

親しい人たちと別れなければならぬことを思へば死は寂しい。しかしよいよ死の時が來たら靜かに眠

つてゆくだけの悟りは欲しい。たとひ二十年でも、五

十年でも、浮世の秋風を身に感じさしていたゝい

たのである。早く落つる木の葉もあり、遅く落つる木

の葉もあるが、所詮は時間の問題である。木の葉はい

つ落つるも、靜かに落ちてゆく。

死ほど悲しいものはない。しかし死ほど尊いもの

はない。人間の一生涯の如法修行の最高の收穫が死の姿

であらう。

八月三日 けふも山は晴れてゐる。めづらしいこと

である。麓の家からトマト、馬鈴薯、キャベツ、茄子



をいたゞく。俄富限者になつたやうな氣がする。

昨夜は故人の夢を見た。

朝來客があり、輕井澤まで往復三里の山徑を歩き、

東京への郵便を出して歸る。鶴溜あたりからはげしい

高原の雷雨に逢ふ。

擬寶珠、女郎花、吾木香、松蟲草、河原撫子等、咲

きみだれた高原の花畑も雷雨に打ち叩かれて見る眼も

悲慘であるが、蟲ばかりははげしい雷鳴にも怖ぢず鳴

きつゞけてゐる。嵐につれて蟲の音までが雷鳴の空に

拉し去られてゆくやうに思はるゝ。

いつとはなしに雷雨は碓氷から妙義の方へ移つて行

つた。今までの嵐を忘れたやうに浅間の方から日がさ

して來た。高原の花は嬉々としてをどるやうだ。花は

一層美しさにかがやく。

花を叩きつけるやうに思ふのは人間の主觀で、雷雨

あつて始めて花はこの高原の熱氣に耐へてゆくのであ

らう。花にとつても、人間にとつても慈雨慈雷といふ

べきであらう。

谷川を渡れば往きには浅い流れであつた。が、かへ

曲川に落ち、信濃川に入るのもあらう。また或るもの

は大利根に入るであらう。そして雨を待つ平原の人々

のために萬頃の稻田をうるほすことであらう。こゝに

至つて高山の雷雨はいよいよ大慈雨といはなければなら

ぬ。何事も人間の狭い小主觀のみで判斷してはなら

ぬ。

夜は寒く、銀河澄徹、そゞろに悠久の時空を想ひ、

人生の須臾を懷ふ。

八月四日 浅間は曇りはじめた。鶯が谷渡りを鳴

いてゐる。百舌が鶯の谷渡りを真似る。しかし百舌

の谷渡りはいかにも板につかない。鶯は得意になつ

て谷渡りを鳴く。百舌がそれを真似る。いかに可笑

しい。山の中の自然にも人間の想像をゆるさないユウ

モアがあるものである。

蟲の音も弱りはじめたやうだ。秋の近づいて來たこ

とを感じさせる。

今日はこの山に來てはじめて、しみじみとした氣持

で山莊の周圍の小徑を歩む。雉子鳩が鳴いてゐる。不

圖東京の家に置いて來た狗子のことを思ふ。



わたくしは信濃の山を愛する。終日ほとんど人の姿も見ないこの山莊を愛する。人間の生活について、静かに考へることのできるこの山を愛する。

日は浅間の西に落ちてゆく。

浅間山いとおほどかに暮れてゆく

わが大いなるかなしみのごとく

八月五日 風やゝ寒し。

有明の月や浅間の秋に入る

八月六日 夜中幾度か寒さに眼覺む。朝より雨。季

はまさに秋に入れり。

夜更けて誦經すれど御佛の國の遠きを歎す。

八月七日 今朝もまた秋のごとき細雨寒し。昨夜は餘りの寒さに、蚊帳を畳み夜具に重ねて寝ねたり。

今朝は霧の中にかくる鳴く。

午後鶴溜を越えて輕井澤に行く。峠に郭公の羽根の散亂せるを見る。草の間に生々しき血痕と嘴のみを

残す。鶯、鷹などの餌食となつたのであらう。合掌して去る。

いけにへの鳥をいたむや山の秋

八月八日 けふも山は曇る。雨をり／＼なり。六里ヶ原を横切つて、草津に行く人を送る。草原に雨寒く山徑しばしば迷ふ。

雲に入る旅人もありけさの秋

陸海軍病院 慰問淨土

寄附者芳名 (敬稱略)

五十	錢	大阪府貝塚町澤	日根野谷記三弘
一圓五十	錢	姫路市坂田町願入寺	北原 良胤
一圓五十	錢	兵庫縣御影町篠源一四〇〇	山口 壽美
一圓八十六	錢	廣島市堺町二ノ一〇	山本 イト
一圓五十	錢	山口縣佐波郡富海村海藏寺	原田 達雄
三圓五十	錢	大阪府西區靱上二ノ四四	高岡 靖子
一圓五十	錢	臺灣北斗郡溪州庄溪	青野 ユサ
十二	圓	山口縣宇部市梶返	坂田 ルヨ
三	圓	東京市神田區神保町二ノ二二	發田 榮藏
三	圓	島根縣安來町	西方寺 支部
五	圓	東京市下谷區竹町十二ノ二二	佐藤 定次
五	圓	廣島市鍛冶屋町宅一	弓削 トラ



謡曲の月光淨土

松 本 龜 松

能樂に「姥捨」といふ曲がある。信濃國の更科に住む男が、両親に死別れて後、叔母を親の様に仕へてゐたが、よる年なみでこの叔母は腰が二重になる程の身體となつた。

これがためにその男の妻は、叔母が家に在ることをうとんじて、男に色々と悪しざまにいたため、男も以前の様に叔母に仕へず、遂に八月十五日名月の夜、叔母には寺に尊き行事があるのを拜ませると偽り、背負つて山深く分け入り、その峯に捨て、逃げ歸つたといふ話が、大和物語や今昔物語、無名抄などに載せられてゐる。この話を基として、能聖世阿彌が作つたのがこの曲である。

場所 信濃國姥捨山。時は八月十五日。都

の人々が姥捨山中秋の名月を見ようとして來ることに、この能は始まる。恰も、夕刻に近くこの人々はいい場所を選んで、月の出を待つてゐるところへ、一人の老女が來合せ。そして、自分は更科の者であるが、この木蔭はその昔年寄つた姥が捨てられたところであると教へ、今宵の月は面白からうから月が出たならば再び來て夜遊の慰めをしようなど、いひ、實はその昔捨てられた老姥は自分である、灰かして、去つて行く。やがて月が出ると約束通り老姥が現はれ、捨てられた怨みも、悲しみも、歎きも總ては夢の世の中のならはしと、御佛の有難い教へを述べ、皎々と照る名月の下に舞を舞ひ、漸く月の光が

薄らぐ夜のあけがた近くに、その姿は消え失せる。

是でこの曲は了るのであるが、所謂三老女の一つとして「梅垣」、「關小町」と共に、

能樂中最も演奏に至難な曲、又最高な藝術的水準に置かれてゐる曲として、ある流儀では家元は六十歳以上、弟子家は七十歳以上でなければ、舞ふことを許さぬといった扱ひに置かれてゐる。その舞の中に弄月の型といつて全く舞ひ疲れた老女が坐つてしまつて、ウツトリと月を眺め、扇に映じた月に興ずるといつた、如何にもこの曲に適はしい、幽玄味豊かな型がある。観者にしても芝居の様に書割りの背景に月が出る譯でもなく、演者の醸し出す雰囲気から感ずるだけなのに、その月光美の世界にたゞ／＼溶け入つて行く思ひがするところである。

私の知人がこの曲を觀ての感激から、この型どころを木彫にしたら、屹度よいに違ひないといつて、某木彫の大家に制作を頼んだ。やがて出来したが、案の定、實によい味に出

來た。素人の私などにも「よいなア」と思はせるものであつた。知人は非常に嬉しがつて是を床の間に置いた。さて、軸をかける段になつたところが、どんなのを懸けても具合が悪い。淡い感じの老女が坐つた姿なのであるから、軸は強くていけず、弱くていけず、構圖にも六ヶしさがあつた。そこで、思案の結果が一策を建てた。といふのは、新しくこの木彫に適はしい軸を作ることであつた。由來の凝り性も手傳つて、日本畫の大家二人を別別に招いて、夫々に軸の揮毫を依頼した。依頼された兩氏は勿論相談などはしなかつたらう。姑くして二幅の軸が出来た。それは構圖のとおり方が全く違つたものであつた。一幅は尺五の絹本に秋の月夜の空を一色に塗りあげ一輪の名月だけが描かれた。下草一ツあしらはれぬいはと皮肉なもので、木彫を生かすことだけに努力され、而も莊嚴な味をスツキリした構圖の中に提へてゐた。他の一幅は二尺の絹本に左右の空の無い程な大輪の月の中に、大勢善菩薩の尊像を判然りと描いた。空

は寫實といふよりは佛畫の約束にでもあるのだらう、非常にクツキリした群青で、尊像も極彩色であつたから、是は相當強い感じがある。併し、尊像から受ける散か味と、ふくよかな感じとで、その強さが氣にならないものになつてゐた。要するに、一つは現實的な描寫、一つは宗教的な表現をしたものであつて、作家夫々の心持がその作品に現れてゐることと、面白さと妙趣とを感じた。そして、何れにしてもこの弄月の型を生ずに十分なものであつた。さて、茲で考へさせられたのは、諸曲には月に對して現實的な描寫と、宗教的な表現とがあるといふことであつた。一體、月の光を浴びた風物の美しさは、凡そこの世の中のどんな美しさよりも、勝つたものであらうと思ふ。塵も芥も一切の汚れを黒一色に包んだ闇の中から、月の光が浮き出させた世界は、全く批判を許さぬ美の極致だとさへ思ふ。是が月光の美に對する現實的な感じである。例へば、古代文化の精神を蒐めた神苑にしても、伽藍にしても、近代文化の精隨に成つた

ビルにしても、工場にしても、乃至は山川海
濱の風光にしても、田舎漁村の景致にしても、
造型と自然とに關らず、感覺の古い新しいの
差別なく、夫々に美しさを感じるのが常であ
る。

而も、四季折々がその美しさに趣きを添へ
るので、謠曲には月を讀へた曲が多い。先づ
春の月では「田村」などが代表的な曲となら
う。清水寺を背景とした聆蕩の春である。彌
滿と咲き亂れた櫻の樹の下に、いとも麗はし
い童子を配した。やがて、音羽山の峯に月が

出る。櫻の木の間から洩れる月の光は、夜嵐
に誘はれて散る花びらを、雪とも見まがふ風
情。月光があればこそ一幅の名畫の題材にも
なる。夏の月には眞の闇夜に、鴉使の亡霊が
松明の灯をたよとして、懺悔の爲に鴉を使
ひ魚を捕る、その陰惨な情景に月を配した名
曲「鴉飼」がある。秋の月で有名な曲は「三
井寺」が推される。名月の夜、所は近江の景
勝三井寺。鐘樓は青い月の光に影を描き、そ
れを背景として愛し子故に狂ふ女が、情緒纏

綿と舞ふ。冬の月には白雪滿山を包む幽邃莫
城山に、月も亦白く、舞ふ神は白装束で、音
も無い白銀の亂舞の幻想を描く「葛城」があ
る。

是等は特に有名な曲を挙げたのであるが、
他の曲にしても月の光が美的な表現に力強く
如何に役立つてゐるか。舞臺の演出を知る程
の人なら、誰にでも了解されよう。そして、
是等の月は現實的な描寫に成功してゐるので
ある。

由來日本的の美は、動よりは靜、派手より
は地味、絢爛よりは簡素に、より多くの要素
が持たれるのを普通とする。いはど、有より
無に近付く程、美の表現が日本的になつてく
る。能樂の表現が美の象徴だといはれるのも、
實は簡化された演出に、重大な理由がある譯
である。モウ一層説明を加へると、一種の境
涯を畫る詞に「風流ならざるところも亦風流」
といふのがあるが、日本的の美も亦、この詞
の持つ内容と同じだと思ふ。風流にこだはる
と風流から遠ざかる。風流でないところにも

信ずること

凡そ人生れて幼なる時は、何事も曾て疑は
ぬものなり。しかるを段々に人がだますから
して物事に疑を起すやうになり、遂にはその
疑の癖がついて、聖賢の言をも疑つて信ぜぬ
ことになるなり。しかし人として忠孝をも疑
ふときは、まづその人間を止めねばならぬ。
かの佐藤嗣信が急戦に際し、その君義經に代
り、箭に當りて死せしが如き、これその君を
信じてその忠を疑はぬからしめることなり。
信とは氷はしややか、火はあつしといへる
がごとく、その法を冷護自知するのが即ち信
なり。故に信はこれを形容していふときは、
曇りなく遠き通りに見へるかの水晶の如き鹽
梅しきのものが信なり。よつてかの淨土の信
といふもまづ極樂を信じてからのことなり。
極樂は「阿彌陀經」には、「これより西方十萬

風流はある。佗びの氣持は茲に在るのであらう。美しからうとして化粧にうきみをやつすと、美に遠ざかる。粧ひをしない簡素な身だしなみが日本の美なのである。要は内的な氣分が問題なのであつて、絶対に外的な修飾や道具立てではない。であるから、簡素は日本的な美を總ての方面に形造るといつても、過言ではないのである。

斯の様な考へ方から、以上の諸曲が抜つてある月の光の美を觀察すると、月の光は總てを簡素な感じとするから、其處に効果を十分にあげ得るのだといへよう。月の光は風物目體の色彩を消しはしない。緑は緑、紅は紅、紺に感ぜしめるが、それが淡いものとなる。その淡い感じが簡素となつてくる。能樂は簡化が目標とされ演出されてゐるので、この共通的な結び合ひはこの藍の味を深めるに、十分役立つ譯である。

では、宗教的な表現とは怎ういふのかといふと、月の光が作つた美には、單に美しいといふだけでなく、そこには一種優し難い崇高

さと、莊嚴さを備へてゐる。文字に乏しい私は之を言ひ現す適當な詞を知らぬが、清澄とか、清素とかいふ意味を、モット／＼強く大きく、響きと匂ひを持つ詞でなければ、表現出来ない様な感じである。而も、宗教上の信仰が實す法悦と同じ感激さへも感ずる。古武士が戰場を照す月に、讚美以上の氣持で禮拜した話があるのも、是があるためであらう。斯うした感じは随分昔から、洋の東西をとはずあつたものらしい。經文には、阿彌陀佛を淨土の主と立て、月はその右の脇士で、本地を大勢至菩薩と立てゝある。

五百數十年の昔、能樂の大成者世阿彌も、月の光に讚歎を惜しまなかつた一人である。色々と現實的にその美を描寫してゐるのもその説明はつくが、その現實的な描寫と同時に、淨土の莊嚴光明をも茲に聯想した。そして、月光美の淨土を熱烈と書いた。それは前に述べた經文にある立前からの影響が、勿論あつたものであらうし、又淨土宗の十夜念佛から思ひついたものであらうといふ説を立て

億の佛土をすぎて世界あり、名けて極樂といふ」と滅法に遠く説けるを「觀無量壽經」に「ここを去ること遠からず」と説けり。故に舍利弗は坐敷の唐紙を見るがごとくにこれを見たまふ。その鹽梅はなほ水底の物を見るが如く透き通りに見ゆる、これ則ち信なり。

しかるにこの信といふことがわからぬと變なことに思ふて先年もある繪草紙に「極樂へはとても行かれぬ。何せならば極樂は十萬億の遠い旅路なるに、毎年七月の盆になると種々の供へ物などして招き返へさるる故に、わずかに出立すると間もなく返り來り、また出かゝるとまた返り來り、始終往きたり返りたりして中途より何度も引戻されねばならぬからとても極樂へ行きつくことは出来まい」と云ふことが出てありし。

時に禪宗でもつばら云ふ所の唯心の淨土といふことも「華嚴經」には「心佛及衆生、是三無差別」とあれば、これ最も聞へたはなしなれども砂糖を買ふた禮に松葉一本を志といふても、まさか通らぬ故に、到底十萬億の極樂の信ぜられぬものは、己心の彌陀も證られ

た人もあるが、何れにしても文藝の上で是を
判然り書いたのは、世阿彌であつたといつて
差支へないので、詠曲には宗教的な表現があ
るといへるのである。

前に掲げた「姥捨」も世阿彌の作として、
その事實を物語る一例であるが、是には、

月は彼の如來の右の脇士として、有縁を
殊に導き、重き罪を輕んずる、天上の力
を得る故に、大勢至と號すとか、天冠の
間に花の光輝き、玉の臺の數々に、他方
の淨土を顯す。玉珠樓の風の音、絲竹の
調とりんに、心引かるゝ方もあり、蓮
色々に咲きまじる、寶の池の邊に、立つ
や並木の花散りて、芬芳しきりに飄れた
り、伽陵頻伽の類無き、摩をたぐへて諸
共に、孔雀鸚鵡の同じく囀る鳥の自ら、
光も影もおしなべて、至らぬ限もなけれ
ば無邊光とは名づけたり、然れども雲月
のある時は影滿ち、又ある時は影闕くる
有爲轉變の、世の中の定のなきを示すな
り、

とあつて、月下の淨化美化が今眼の前に、莊
嚴の淨土を顯した思ひを起させる。二人の畫
家がこの二つの面に、夫々の着想を置いたの
も面白いことであるが、從つて是等が木彫を
生かしたのも故なしとしない。

世阿彌はこの月光美の淨土觀の他に、指
方立相の淨土觀、去之不遠の淨土觀も亦、そ
の作中に扱つて居るが、茲ではそれに觸れな
いでおく。

兎に角、世阿彌が書いた月光美の淨土觀は
以上の様な理論に基いたといつて間違ひでは
なからうが、要するに月の光の美しさにうた
れて、この理論に到着したと見てよいと思
ふ。

であるから、姥捨の老女に心持の上で
面を更科の月に見ゆるも恥かしや

といはせ、月下の美しさに耽入らしめてゐ
る。餘り美しい月にはこの心持は世阿彌でな
くても起る。私にも次の句がある。

名月の暗さもとめて歩きけり

ぬなり。また己心の彌陀の悟られぬものは十
萬億の淨土も信ぜられぬなり。よつてまづ信
を十分に工夫して、朝夕にこれを考へ深く信
を起すべきなり。

しかるに中には坊主では飯が食へぬからと
て、還俗するものもあるが、これはまづ元來坊
主といふものは有難いものぢやといふことが
信ぜられぬからのことなり。しかしてまた惡
にもこの信といふことがあるかといふに全體
悪いことも信ぜられぬことはなきやうなれど
も、悪いことには決して信ずるといふことな
きなり。どんな大盜賊でも盜賊は有難いと信
じはせぬ。みなオツカナビツカナにてする。
それを有難いと信じて疑はぬことは出來ぬ。
故に信は惡の上には絶てなし。ただ善事にの
み限れり。しかし善事にても無記にてやつて
見ようか位にては勝解の信は決して付かぬと
たしかに覺悟すべきなり。戰も必ず勝と胸算
しても戰爭して勝て見ねばきつと勝つことは
信ぜられぬ。信もまた眞實信じなければかつ
て疑はぬ信は生ぜぬ。これ所謂信は冷後自知
の故なればなり。

歌壇

山戸野
喜久代選

長野縣 丸山 方園

大いなる皇國の力疑はず吾生業の
田畑たがやす

評

大君のみのつ下、日本の
國力の如何に大きく強いかを
今度の大東亞戰は、はつきり
國民の一人一人の胸裏に叩き
こんだ。作者も安んじて、喜
んで、奮ひたつて農耕にはげ
もうと決心するのであつた。

東京 上野 昌子

菅船長を偲ぶ

輝けるいさをはあれどそは云はず
古武士のごとく責負ひて死ぬ

評

米船捕獲の大手柄をたてな
がら、その手柄と、長崎丸爆
沈の不慮の災害とを相殺せ
ず、あくまで船長としての責
務を感じて自決した菅船長、
そは、日本人的な責任感に徹
した人であらう。私共はこの
死によつてどの位精神を高く
引上げられたかわからない。
岩手縣 中村 てつ

雨止みて日ざし猛なる夏の午後風
にかをるは何の花ぞも

評

風が花の香を運んで来た。
何の花であらうと作者は云つ
てゐるのだが、眞夏の灼熱の
太陽下に芳香を放つものであ
れば、それはきつと眞赤な花
か眞黄色の花、それも大輪の
ものに違ひないと讀者である
私は想像する。

三重縣 青木 桂山

大船を七つの海に打出だし大鯨と
る海の若もの

栃木縣 大輪 清

生も死も大み心のままと云ふよき
み極もて固めけるかな

兵庫縣 山本タカ子

悟れりと思ひ上りてありしかど陽
炎のごと心ゆらぎぬ

滋賀縣 彌生

日の光さし入る如く全てより受く
る恵みの限りなきかな

東京 三野輪幸節
二つ岳の上なる雲を朱に染めて伊
香保の町はくれそめにけり

茨城縣 眞木謙太郎
眞紅なる栢櫛の花の散り敷けばい
よよ寂びたり庭の苔苔

東京 藤林 貞子

しづかなる心をもちて今あれど悶
え泣きせし日をえ忘れず

満洲國 鶴岡 慈禮

一本の道かの山に入りにつつ鯨道
ふ如く人馬續きぬ

熊本縣 五野 一三

いと暑し油鯨啼きぬるき風大豆の
裏葉白くかへせど

朝鮮 中村 茂舞

北邊の護り固しもゆるぎなし哨戒
機また國境を飛ぶ

北海道 花田 順往

隣近くやどりし老がねざめをばな
ぐさめて訪ふ波の音かな

愛知縣 稻本 利一

わが病ひ悲しけれども死ぬ勿れ
再び君に召さるゝ日來よ

靜岡縣 一向山人

凱旋の軍醫は云ひぬつはものは死
ぬ際すべて安けかりしと

兵庫縣 水谷 良子
洩れ来る琴の音戀し母ありし日と
わが小さき日を思ふかな

京都 竹内 修吾

英靈のみ名の載りたる新聞を讀み
つつ獨り伏し拜むかな

北海道 山本 由馬

椰子の木の蔭にて書きし弟のい
くさだよりをくり返し讀む

滋賀縣 重野ふみ子

みいくさに征くつはものになてま
つる共に戰まん彌陀のまもりを

京都 福島幸治郎

ああ征けり、大八洲よりおほわた
へ風切りて飛ぶ若き荒鷲

秋田市 妹尾鳥之助

雨乞ひを野の人するときくほどに
祈りのしるし見えて嬉しき

朝鮮 谷 鉄三郎

みいくさはこの海原のはて遠く萬
里につぎ行はるたれ

鹿児島縣 西村 正一

井戸つるべしばらくたもて、ちは
やふる神に捧げん水をくむまで

井戸つるべしばらくたもて、ちは

投稿規定

内はきに一回二篇以
内とし、淨土二篇以
部歌壇係あて住所氏
名明記の上送ること



婦人の龜鑑

實話

心の石碑

山下 晋郎

茨城縣取手町は水戸街道の宿場としてわか

しは相當名の賣れた所であつた。しかし今では

はわずかにそのおもかげを偲ぶだけになつて

しまつた。田口こうさんはこの町のはづれに

蘆草屋を営んでゐる。この家は彼女の一人息子

子である利根農林學校長たる富五郎氏の建て

たものであつて、本來なら富五郎氏の許に身

を寄せて可愛い孫の世話でもするところであ

るが、靖國の社頭にしづまり給ふ夫の墓守り

のため、こうして獨りで靜かに餘生を楽しん

でゐるのであつた。

彼女は老ひの目をしばたゝきながら義弟の

郎氏の息子磯治氏が中支那の武寧で戦死した

のは忘れもしない昭和十五年五月十六日であ

つた。こうさんが三十年間遺族として奮闘し

てきた甲斐あつて、昭和十五年、即ち紀元二

千六百年の佳き年を迎へ、彼女もまた六十一

歳になつた八月四日に息子の富五郎氏とともに

満洲に渡り約一ヶ月に亘つて當時の激戦の

地を尋ね、ひたすら地下に眠る良人の英靈を

なぐさめることが出来た。丁度その時甥にあ

たる磯治氏の名譽の戦死の報を手にしたので

ある。いまこうして彼の遺族のもとに送る手

紙の中にも自づと自分の體験がにじみ出て、

思はず知らず苦しかつた當時のことが浮び上

つてくるのであつた。

明治三十七年、わが帝國は國運を賭して露

國と戦つた。そして大陸ではわが將兵たちが

進撃に進撃をかさねて行つた。

やはりその頃田口こうの良人、定次郎もあ

る夜のことお召の令狀を受け取つた。補充兵

であつた定次郎はこんなに早くとは思はなかつ

たが、明後日佐倉第二聯隊に入隊せよの文

面をみたとき、定次郎の掌は感激にふるへた。

「おい！」

彼はそばにゐるこうに呼びかけた。

「……お前も知つてゐる通り、今度の戦争は

生きて還れると思つたら大間違ひなんだ。」

といつてその後がどうしても口から出なかつた。隣の部屋には母親のあさと弟妹の三吉慶次郎、なか、きいの四人がゐるのだ。妻のこうが抱きかゝへるやうにしてゐる一人息子の富五郎をみたとき、僅か五歳の富五郎一人を育てゝゆくさへ並大抵でないのに、自分の亡き後を一切妻に頼み込むのが何うしてはばかられるのであつた。

「おい！ 再び妻に呼びかける定次郎の聲は低かつた。
「萬一、俺が生きて還らぬ時には、お前、あの三吉と夫婦になつてこの家を支へていつてくれまいか。……」

それは彼の何よりも辛い言葉であつた。弟とはいへ、三吉はまだ十六である。それは二十四にもなつたこうに、彼の心は引きさ



けるばかりであつた。しかし女手一つで六人の家人を頼むといふのは定次郎には云へぬ相談であつた。だがこの言葉を聞いたこうはきつと顔をあげて良人をみつめた。
「お前さん、お前さんは本気でそんなことを

云つてゐるかい。ねえお前さん、わたしはどんなことがあつてもお前さんの妻だよ。……後のことなんか心配しないで、征つてきておくれよ。火のやうな妻の言葉に定次郎は己れ

を愧ぢてうなだれた。

「濟まなんだなア、俺ア……」

翌朝、定次郎は、元氣に出發した。

良人を戦地に送つたこうは、その日から勘かねばならなかつた。貧苦は一日々と出口一家を襲つてきたが、それでも良人を戦地に送つてゐると思へば、そんな事位はまだしれた。

こんな日が三ヶ月過ぎたある日の午後、良人の配屬してゐた野戦第三軍第一師團から突然一通の封書がとどいた。それはいふまでもなく定次郎戦死の公報だつた。

ふるへる掌をおししづめ、こうは何度も何度もその手紙を読んだ。清國盛京省松樹山の激戦に……といふ文字が焼けつくやうに身に迫つた。

「ああ、あのひとはこの世にゐないのだ」

ぎゅつと手紙を握りしめ、彼女は子富五郎の顔を見、それから他の五人の顔を眺めた。

それからまた、こうは動きはじめた。苦しい一日々々が経つて、翌年の春淺いある日、

戦地から良人の遺骨が取手の町に無言の凱旋をした。こうは生きてゐる人に會ふやうに、その遺骨と涙の對面をした。

こうはもはや以前と同じ氣持で働くことが出来なかつた。待つてゐても還つて来てくれる人はないといふことが彼女には何よりも悲しかつた。深夜の床でこれから生きてゆく道についてあれこれと考へ耽つた。

こうは先づ自分が針仕事がよく出来ないの、暇をみてはそれ習ひに通ひ始めた。それは定次郎が左官を業とし、田畑となかつたので、着物の賃繰で金をかせぐためであつた。良人の戦死したときお上から公債證書で貰いた四百五十圓に對する利子と、遺族扶助料として月割十三圓餘りの補助を合せても、一家七人の生計を支へてゆくには必死で賃繰をしなければならなかつた。

わが子や近所から来てゐるお針ッ娘の前をかくして彼女は何度晝飯を喰べたやうな恰好をしたことであらう。

ところがこんな苦しい生活状態を知つてゐ

ながら、親戚からは定次郎の石碑を建てるやうに迫つてきた。そのため親戚たちに石碑を建てない云ひ譚をするだけでも容易でなかつた。息子のことを考へると賜金をいま石碑のために使ひ果すのは身を切られるより辛かつた。大きな石碑はすでに自分の心の中に建つてゐて毎日掌を合せてゐるではないか、この賜金は息子の教育資金に使ふのだと頑強に主張し通した。

こうは相談して妹のなかと弟の慶次郎に傳手を求めて東京へ働きに出てもらひ、一方で當時逓信省が遺族たちに優先的に許可をしてゐた収入印紙の賣捌きをさせてもらつた。

こうのたつた一つの樂しみは一人息子の富五郎の成長であつた。その富五郎が中學に入つたとき彼女はどんなに喜んだことであらう。けれど中學は取手から四里半もあり、朝五時に家を出て日が暮れて歸つてくる富五郎をみるとその眼がそのまゝ涙になるのだつた。靴のない彼は藁草履や跣で通つた。遂に

富五郎は家庭の窮迫振りをみかねて母親に休學を申し出た。しかしこうはそれを斷然しりぞけたばかりか却つて息子に自轉車を買つて與へた。これに感泣して彼は熱心に勉強した。だが新學期の度、この母と子は聲を落して暗い部屋の中で向ひ合はねばならなかつた。

こうして富五郎が中學を卒業し、それを喜び合つたのも束の間で、今度はいままでも一家の生計を救つてゐた収入印紙の賣捌きが急に出来なくなつた。

その當時田舎のことなので収入印紙のきれることが間々あつた。そのため迷惑をする人も多かつた。こうはこの不便を見かねて、わざわざ利根川を渡り我孫子の町から印紙を買ひ求めてきて、人々の便宜を計つた。それは損こそすれ儲かる仕事では決してなかつた。けれどもそれが賣捌規定に違反してゐるといふことを理由に逓信省へ投書されたのである。僅かとはいへ毎月の定期収入の道をたゞれた彼女の家はまたまた新しい苦難の日になつた。富五郎の上級學校への希望は一時芽を



折られた。折角こゝまで来て……と思ふと、
母親のこうは堪へられなかつた。

「済まないねえ」

「何をいふんだ、母アさん！」

富五郎はその時フト小學校の代用教員に出
ようと決心した。自分が働けば少しでも家は
立て直るであらうと考へた。

富五郎は一年間代用教員を勤めた。彼の月

國

給は、使つてしまへば暮しが樂にならうものを、その中から學資が貯蓄されてゐた。やがて富五郎は母親の勧めに従ひ上田の高等農林專門學校に入つた。丁度歐洲大戦當時で物價が高かつた。とつておきの公債證書が賣り拂はれ、遺族扶助料さへ高い利子で前借りするまでになつた。けれど苦しいながらもこうは何か愉しかつた。この日のためにと心に誓つてゐた公債證書だと思ふと、遠く家を離れて上田の町にゐる息子に向つて「富五郎！」と大きく叫びたい程であつた。

こうした苦闘が酬ひられ、大正十一年三月には富五郎は同校を卒へ福島縣立相馬農産學校の教諭に任ぜられた。この感激に母とては

息子が就職した後も、こうは家に残つて働き續けた。亡夫の石碑を立派に建てるためである。また富五郎もよく孝養をつくした。母の隠居所に現在の家を建てた。そして遂に念願の亡夫の石碑も建つた。石碑落成の日に群馬縣勢多農林學校教頭になつてゐた富五郎夫妻が孫をつれて歸つてきた。こうは三十年前良人の遺骨を取手の町に迎へた時のやうに老目の目に涙を浮べて、墓前に報告したのであつた。もはや、こうには思ひ残すこともなかつた。

しかも紀元二千六百年の佳き年に、こうも六十一歳になり富五郎とともに滿洲に渡り、牡丹江、奉天、新京、旅順、松樹山、二里山大連と一ヶ月に渡つて當時の激戦の地を尋ね、地下に眠る良人の英靈を慰めた。

炎熱肌をやく眞夏の一日、大陸の野に額いたこの母と子の顔に、筆にもつくせぬ感激が流れたのは云ふまでもないことであつた。

(福田 勇畫)



蓮はすを觀みる會くわい

池田 立基

大賀一郎博士の蓮を観る會が、昨年は會場使用不能の爲め休會、其以外は數十年の間、不忍池の辨天堂書院で行はれるのが例になつて居ります。博士は蓮で博士となり、全生涯を蓮と共にして居られる人で、何れは九品蓮臺上にお生れになる方でせう。去る七月廿三日午後六時より蓮に關する講演會があり、私も佛教と蓮と云ふことについて三十分程お話を致しました。以下は速記の一部であります。

蓮の繪を見れば佛事を思ひ出し、佛様の話が出れば必ず蓮華を思ひ浮べると云ふ風に、兩者の關係は切つても切れぬ間柄であります。従つて話す材料も餘りに多くて短時間の話題としては取捨操擇に苦しむものであります。斷片的に頭の中に浮かんで來たことを一つ二つお話致すに停めて置きます。

佛教と蓮との關係について申しますと、佛教の起つた土地、即ち印度地方は、北部ヒマラヤ山地以外は大部分高熱地帯で、住民は非常に炎熱苦を味つて居ります。「清涼」と云ふものを求むるのは自然の欲求でありました。清淨無垢な蓮の花を眞善美を表現するものとして、憧憬するに至つたものと思はれます。いくら清らかに美しい蓮の花でも、西比利亞やアラスカでは住民の頭にピンと來る何物もないでせう。

寒い曇り勝ちな英國では、暖を求める心が強く、その爲にストーブの發達を來し、住民を魅する標語に「ファイヤサイド」と云ふ語がある位です。クリスマス前の夜なども、寒さと暖さが對蹠的に苦樂を顯示して居ります。戸外に霏々として雪が降り、室内には高さも幅さも一間以上もあらうと云ふ大ストーブの中に山の様に積んだ薪や石炭が、囂々と唸つて居なくては、アーメンと心から感謝の言葉が出ない様に思はれます。

丁度それと同じ様に、炎熱で苦しみ、清涼の氣分を樹陰または水邊に求める人々には、あの清淨な蓮華が渾身の目標となり、厭穢欣淨とか願往生の心が目覺めずには居ないでせう。但しこの蓮と云ふ

花は印度地方に限つたものではなく熱帯の各地に分布されて居ります。其分布地圖は既に十數年前に英文で大賀博士によつて公刊されて居りますが其分布圖により博士は大東亞共榮圈と蓮の分布地帯が合致すると云はれました。東は中部南部アメリカより西はベルシヤ



(筆 画 之 賀 上 尼) 音 觀 葉 一

に至つて居るのであります。興味あるお説ですが此點に關して私は博士に蓮の分布圖の訂正を申込んだのでありまして、蓮はベルシヤより更に西に伸び埃及に及んで居るのであります。埃及人の聖花として古くより存して居り、またホーマー寓詩にも、蓮の美味を説いて、國外より來れるもの、一度其實を喫せんか國へ歸るのを忘れる程であると言はれて居ります。蓮の事をロテウスと名けるのは、其實を食つて居た古代アフリカ的一種族ロトフアージュ人の名稱から來て居るので、蓮の分布説を北アフリカ迄持つて行く様に申入れをしたのであります。

これは私が自分の學説を主張すると云ふよりも、東亞共榮圈の擴大を望む、小さな愛國心からであります。それに博士の説によると蓮は決して或國から各國へ移植されて擴がつたのではなくて、其國自生の蓮があつたと云ふことでもあります。從來は日本の蓮は佛教傳來と共に支那根の化石が發見され、日本にも數千年も前より蓮があつたと云ふ事が證明されるに至つた相で極めて興味ある發見であります。

蓮花に蓮根は附物であることは勿論ですが今は主として蓮の花に

ついでお話を申し上げます。私共の感じは大部分周囲の環境によつて支配されます。美しい蓮の花でも田舎の農園に咲いて居ては、其花の美よりも、その根、即ち蓮根の出来榮、農家の收穫に思ひを致す様になります。今不忍池畔の蓮の花を見る人は誰でも其泥中の蓮根の事など思ひ出す人はいないでせう。其花の美しさを嘆賞するのみです。あの蓮の花の中に小さな辨財天のお姿を思ひ浮かべる人はあつても、蓮根の肥えて居るか何うかを考えた人はなさうです。

蓮には種々種類がありまして不忍の池にも十數種ある相ですが、印度蓮は特に印度蓮と云ふ名稱があり、また前に申しました埃及蓮は睡蓮の一種であり、其他和蘭蓮もあり、シ、リー蓮もあり、其他多種多様なであります。何れにしても水中にありて水に濡れず、泥中にありて泥にそまず、爲に神聖視されるに至つたのであります。我國で見られるのは形は餘り大きくはありませんが、眞直ぐに長い莖の上に、美しい花がふくよかに咲くあたり、何となく力あり、靈あるものゝ如くであります。勿論強風でも吹きますと、葉は破れ、莖は曲がり、いかにも脆い姿を見せることがあります。これも浮世の風のせい、仕方がないでせう。蓮の花少し曲るも浮世かな」と一茶も申して居ります。

色は青黄赤白とありますが、矢張り白が一番です。この不忍の池にも以前は白ばかりではなかつたかと思はれます。世人もこれ呼んで白蓮の池と呼んだのが、いつの間にか篠簞の池とか不忍の池と

云ふ風に訛つて來たのではないでせうか。東晉の廬山に慧遠法師は念佛同行の結社を作り境内に淨池を堀り白蓮を植えて白蓮社と號したと申されます。念佛行者は人中の芬芳啊華なりと申します。即ちブンダリーカ、白蓮華であります。穢土にあつて穢れに染まず、淨きこと白蓮華の如しと云ふ所より慧遠法師も白蓮社と名けたのでせう。蓮の花を穢より出で、淨を作ると云ひ、泥の様な穢れた所から白蓮の様に美しい淨土の境界を欣ぶ、厭欣の表象としたものであります。

地方のお寺でよく見かけることでありますが門を入つて本堂に至る敷石の兩側に池があり向つて左側に赤い蓮華、右側に白い蓮華の植えてある所があります。これは二河白道を表したものであります。高祖善導大師觀經散善義の御釋文の中に三心の同向發願心の釋下にあげられた有名な譬喩であります。願往生の人が貪慾瞋恚の煩惱の中に芽さす弱々しい願往生心をお示しになつたものであります。瞋恚の煩惱を火、貪慾の煩惱を水とし中央の尺にも足らぬ細い白道を願往生心としたのであります。本堂と門の間の敷石を白道に見立て、水火の兩河を紅白の蓮華で表現し、參詣の人々に同向發願心をまぎ／＼と教示するあたりは、相當に頭の善い住職の構想と感服させられた事があります。清淨な蓮を煩惱の表現にした所は蓮が冒濫された様な氣もしますが考え様によつては煩惱また一概に捨てたものでもない筈です。

それから大部分の佛菩薩は皆蓮臺上に居られます。

神様が雲の上に、キリストが十字架の上に、仁田四郎が猪の上に、それと同じ様に、佛菩薩は常に蓮臺の上に居られます。

釋尊成道の時お座りになりましたのが金剛座であります。「マカダ國寂滅道場に於て始めて正覺を成ずる時、其の金剛具足嚴淨なり」と華嚴經にあり、また思婆沙命にも「この三千大千世界の中の瞻部洲に金剛座あり、上は地際を極め下は金輪による、菩薩これに座して正等覺を成ず、これを除き堅固の依據あることなし」と記されてあります。何れにしても堅固不動の座をお携ひになつた佛様が、如何にも弱々しい莖の上に、觸れなば散らんばかりの蓮花の上に結加扶座せられて居るのは不思議に思はれませうが、これは佛の神通力を示す爲にお座りになつて居るので、智論に

この世のお客

氣ながく心おだやかにして、よろづに儉約の仕方は不自由を忍ぶにあり、この世に客にきたと思へば何の苦しみもなし。

朝夕の食事はうまからずとも褒めて食ふべし、元來客の身なれば好き嫌ひは申されまし。

今日の行きおくり、子孫兄弟によく挨拶して、娑婆のお暇申すべし。(伊達政宗の遺訓)

「諸牀は世間白衣の座法とす、蓮華は濡淨柔脆なり、神力を

現せんとして能く其上に座し、蓮華をして壞れざらしむ、また莊嚴妙法の座なるが故に」とあります。

何れにしても佛の座しむる所は獅子座と號せられます。宛も獅子百獸中に獨歩し畏るゝことなく能く一切を伏する如く、佛も九十六種の外道一切の人天の中に於て一切を降伏するが故に佛を人中の獅子となし、其座を獅子座と名けることになつて居りますから、蓮華の脆弱性について御心配は御無用と存じます。日本でこそ蓮の花は小さくて、蛙の座蒲團位ですが、印度へ参りますと相當大きいのがありますし、歐洲の上流社會の庭園には、ヰイクトリヤと云ふ一種の蓮が泉水に栽培されてありますが、小供が座れる位になつて居りまた諸經中に散見するものは皆相當に大きく、天上の蓮華に至つては車蓋の如く、佛の座り玉ふ蓮華は其百千萬倍と云ふことであります。一葉觀音や、瑠璃觀音の如きは唯一葉の花舞の小舟の如く水に浮べて、其上に座を占めて居られます。

蓮臺以外に、手に蓮華を持せられるもの、頭上の寶冠に載せられてあるもの、其他種々雑多の莊嚴に蓮華が使用されて居ります。釋尊出世前の古代印度の宗教でも、此蓮華は盛んに使用されて居りますが、其中でちよつと風変わりなものを挙げますと、ビスマ天であります。

此の天部は宇宙の創造神たる梵天、破壊神たる濕婆と同列の、護持の神でありますが、蓮臺はなく、數頭の蛇體から成る舟に横はつ

て居ります。其代り蓮華は其の隣の中から高く生え出て、其の花の中に梵天が結加伏座して居ります。其他蓮華に關しては學究的にお話しすべきことが非常に多いと思ひますが此邊で停めて置きます。傍道へ外れる様ですが、只今お話致しました毘瑟鉢天は西洋神話のヴィナスであらうと思ふのであります。美の神、戀愛の神、享樂の神、多産の神、富貴名聞の神、と云ふ點で似て居りますのみならず、更に梵名ヴェニユと佛蘭西語で云ふヴェニスと同じ發音なども私は面白く見出ししました。聊か蛇足の嫌がありますが一言申上げて置きます。

以上記憶を辿つて散漫なお話を申上げましたが、終りに臨んで一言觀蓮會々員諸君の爲に申上げたいのは、此非常時に際し、石氣相に蓮の花見でもあるまいと評された人のあるのを聞きました。しかし私共はこの花を觀賞しつゝも種々なことを考へさせられて居るの

であります。

淨土に生れたいと云ふ願往生の心も起り、心を清淨に持して利他の爲に自己を犠牲にしようと思ふ氣も起るのであります。

あの美しい、淨らかな蓮の花を造りあげたのは、水底にあつて人の目に觸れない、穢い泥であります。觀賞者から何等の讃辭を受けずとも、泥は一言の不平等も申しません。此淨い花の爲に四六時中、倦まず、休まず、肥料を送つて居ります。私共銃後にある者も、此の泥の役目を買つて働かなければなりません。第一線にある忠君愛國の純な花の爲に、物質的にも、科學的にも、精神的にも、不斷の努力を以て、月月火水木金土と撓ゆまず營養補給を怠らぬ様になければならぬと、緊陣一番大奮發大勇猛心を起しますので、蓮の觀賞もまた、意義ありと云ふべきかと存じます。

魚 母 念 子

步増上寺法主であられた道重信教大僧正がかつて教化のため北海道から東北地方を廻られたことがあります。そして丁度東北のある村に來られた時に、一人の婦人が道重法主のところ來て何か揮毫をしてくれと頼みまし

た。その婦人の申すには、

「毎日お念佛によつて生活させて頂き、今となつて何一つ不足のない自分でありませう。妾には澤山の子供がありますが、皆それ相當の地位につきそれぞれ一人前に働いてゐます。

がしかしただ一つ心配なのは、妾が丈夫で生きてゐる内はよいが、若し死んだ後になつても、尚澤山の子供等が母のことを忘れずに、か

うした母に育てられたのかと兄弟が集まる度に幼時の事を思ひ出し、その親しみを増しますやうしたいのであります。そのため後に残す記念のために御揮毫を頂けたらとお願ひ致す次第であります。」

この婦人の希望を聞いた道重法主は早速に筆を持つて「魚母念子」と書かれました。そして道重法主は母の慈愛について次のやうに

お説きになりました。

× ×

大聖釋尊はお經文の中に「魚母念子」といふ一句をお殘し下されてあります。この句は魚の母が子を憶念して忘れぬといふ意味であつて親の慈愛の深くして且つ切なることをお示しになつたものであります。

秋のお彼岸時分に農村に行つてみると、見事に稻が實を結んでゐて、春の植付時分から田の中に引いてあつた水がもはや不用になつてゐます。そこで水落しと申してその水を川の方へ切り落します。すると河の中に棲息してゐた魚族は田の水のために俗に落魚と申して川下の方に押流され、遂には海際まで行つてここで死するもあれば捕へらるるもありまゐります。また人間はこの落魚の時機を見て俗に「ヤナ」と申す捕魚装置をしてこれを捕獲するが常であります。かゝる運命にある魚族も、その子を思ふ一念は矢張りあるもので、河の中の「エラ」と稱する安全な所の岩台に卵を産みつけて、己れはたとへ水落しの時機

や乃至は人のために捕はれて死んでしまつても、その子だけは翌春になつて安全に孵化するやうにと念力を通はしてゐるのであります。この母魚の慈愛の一念、熱愛、眞劍の母性愛によつて魚子は安々と生育するのであるといふのが「魚母念子」といふ句の意味であります。

よく聞く言葉に「親はなくとも兒は育つ」と申すのがあります。この言葉を口にする人は親が子を思ふ一念を知つてか知らずにか私も知りませんが、しかし皆この世の親は兒を完全に育てたいといふ念力を言ひ現した言葉であるやうに思はれます。

かの兼輔卿の歌に

人の親の心は闇にあらねども

子を思ふ道に迷ひぬるかな

と詠まれてある通り、その慈愛の極は盲目的にまでなります。この愛があればこそ子は育つので猛火の中、濁流の中にも子故とならば突き進むのは世の親の外にはありません。

誰やらの句に

夜や寒し貰ひ乳の戸を叩きかね

とあります。實によく眞情をうがつた句であります。凍りつく寒氣が天地を封じた夜更けになつて、先方では既に温かく寢床の中で圓かな夢地を辿つてゐるといふ矢先に表戸を下ンドン叩いて呼び起すのは誰でも氣の引けたものであります。といつてそのまゝ家に歸れば子は餓えます。あゝ早く夜が明けてくれ、ばよいにと、涙と共に氷る月下をとつおいて一足歩いては思案し二足歩いては思ひ泣き、さてそれかと云つても人の寢込んでゐる所を叩き起すも氣の毒と、途方に暮れてゐるさまを一句したものであります。實に親の子を育つる艱難苦勞は筆にも口にも云ひ現はし難い程であります。彼の幕末の志士吉田松陰先生は

親思ふところにまさる親心

今日のおとづれいかに聞くらん

と詠まれた通り眞の孝子の眞心は斯くの如くに濃厚でなくてはなりません。



戦友愛の前線實話

上原一等兵の死

野 須 喧 雄

「上原、分隊長殿もあゝおつしやるんだ。

お前ばかりではない。この杉木だつて、内藤だつて同じことではないか。男らしくないぞ」

「分隊長殿、しかし上原は残念です。最後までやりたいのです。例へ行軍中に倒れても上原は満足なんです。それをそれなのに……」

「馬鹿、貴様はこれ以上分隊長殿に迷惑かけるつもりか。子供みたいに何時までも泣いてゐるやつがあるか……」

「……」
「ナア上原、それなら俺が話して聞かさう」

いくらなだめても聞き入れさうもない上原一等兵に麻山軍曹がことのいきさつを語り始めた。

彼等の所屬する聯隊はもう半歳以上も一地の警備に任じてゐた。だから同じ仕事が続くのであきたといふわけではないが、他の聯隊が華々しい戦闘に参加して次々と輝く武功をたてるのを聞いてはデツとしてゐられない氣持になつてゐた。こうした所に彼等の聯隊にも出動命令が下つた。久し振りに戦線にたてるといふので、もう聯隊中は大變な騒ぎであつた。彼等の中隊でも中隊長以下全員がなんとなく浮き／＼して準備に忙殺されてゐた。

この時間問題になつたのが、折から醫務室に入つてゐた四名のことであつた。しかしこれは結局他隊の醫務室に預つてもらふことに決つた。だが、それで済まないのは他隊の醫務室に残されることがなつた者達であつた。殊に何うやら歩けば歩けばさうな麻山軍曹と上原一等兵が承知出来なかつた。早速この二人は上官たちに同行を懇願して廻つた。しかしもとより願つても中隊と一緒に連れて行つてもらへるわけがなかつた。特に麻山軍曹の如きは駄々をこねて承知しない上原一等兵を説教するのために、何時の間にか自分の同行云々は消しとんで、殘留組の指揮者になりきつてしまひ、さうと氣がついた時は唯自分で苦笑するより外はなかつた。



麻山軍曹は上原一等兵のために随分頼んで廻つた。しかし中隊長が上原一等兵を連れてゆくことに全然反對したので何うにもならなかつた。中隊長の云ひ分としては、上原一等兵にはすでに一度前例があるといふのであつた。上原が脚氣にかゝつて倒れた時も、軍醫に診断を受けないことは勿論極力自分の病氣をかくし通した。が結局、脚氣であることが

知れ入室してから自分の病狀を偽つて退室し、無理に勤務に服したため遂に動けぬまでに病勢を重くしてしまつた。だからこの上原が何んと言へども中隊長が同意しないのも當然であつた。反つて麻山までが餘けいなことを云ふと中隊長から叱られてしまつた。

「初めの内は寢てゐて動けぬ杉山上等兵や内藤一等兵だつて連れて行つてもらふ心算でゐたさ。所が中隊長殿から、病人は快るまで我慢して寢てゐるのが任務だぞ、十分養生して早く元氣になり中隊に歸るのがお前たちの役目だ。それを指揮者たるお前までが頼み廻るとは何事だと叱られてしまつた。俺は中隊長殿が俺達を連れて行つては行動の邪魔だとは一言も云はなかつたのを有難いと思つてゐる。さうだらう、上原……」

「よく分りました。申し譯ありません。これから専心養生します。」

分隊長の諄々とした話にさすがの上原一等兵も元氣よくかう云つて顔をあげた。

それからの毎日は中隊の噂をしながら一心

に養生に努めた。その甲斐あつて麻山軍曹の下痢はもとより、杉山上等兵の大腸カタルも内藤一等兵のマラリヤもずんずん目に見えて快方に向つた。上原二等兵の脚氣もすつかり元氣になつた。

一ヶ月が経過した或る日、麻山軍曹がせひ中隊に追求させて欲しいと軍醫に出発の計しを乞ふた。初めの内は「上原の脚氣が氣になる」といつて容易に許しさうもなかつた軍醫も終ひには「それ程までに中隊に歸りたいなら行くがよい。」と怒つたやうに承知した。かうしていよいよ中隊の後を追つて出発することに、やがてその日になつた。

「さあいいか」

「出発準備完了」

「前進！」

麻山軍曹の號令一下、隊伍堂々といひたいたところだが、僅か一行四名の部隊では仕方になかつた。それでも久し振りになつた銃や背囊も輕々と隊伍を整へて出発した。今夜にも懐しい中隊に歸れるかのやうに浮き浮きと

して歩きに歩いた。初めの數日は兵站宿舎に宿りを重ねた。それから先きは警備隊から警備隊へと一夜の宿をかりながら、前進を續けて行つた。

しかし何しろ長く病床にあつた者ばかりである。意氣だけは旺んでも足の方が云ふことを聞かないことが多かつた。病氣が一番輕かつた麻山軍曹は一番元氣な筈であるが、小肥りの彼は行軍に弱い方なので、疲れる程度は他のものと變りはなかつた。自然口かずも少なくなつて黙りこくることが多かつた。一行四名の行軍は確かに軍醫の心配したやうに無理なものであつた。日一日とこの疲労が目立つてはげしくなつてきた。病後の彼等の足を前へ歩かせてゐるものは唯中隊に歸れるのだといふことだけであつた。彼等にしてみれば中隊は自分の生れた家であり自分の最後をかざる死場所である。今頃は戦鬨に寧日ないであらう戦友達は彼等の兄弟であり、死ぬ時は一緒だと約束した盟士なのである。彼等一行は目の戦友の顔を浮べ、頭の

中に懐しい中隊を描いて、一刻も早く一語にになりたいといふ氣持だけが彼等を歩かせてゐるのであつた。歩かせるといふより彼等を引きづつてゐるといふ方が正しかつた。

この四名の中で一番元氣に見えるのは上原一等兵であつた。中隊の誰彼について可笑しかつたこと、失敗した話をしやべつては自分で笑つてゐた。しかしこの上原の冗談に返事するものは一人もなかつた。冗談どころでない位に疲れてゐたのであつた。

「分隊長殿、自分が銃を持ちませう」

と上原一等兵が麻山軍曹に手を出した。

「いゝよいゝよ、お前だつて……と麻山軍曹が一人一倍疲れてゐるよ」と口先きまで出かゝつた言葉を思はずのみ込んで、銃を持つてゐるではないか」と云つた。

「大丈夫です。行軍には自信があるのですから、銃を持たせて下さい。」

「上原は強情だからな、いゝ元氣だよ、この分なら俺も安心だ。悪いが銃を持つてもらふか」と麻山軍曹は銃を渡した。

見渡す限り麥が實つて黄金の波をうつてゐた。人家とても一軒もない。今夜の宿舎は

あの岡を越さぬといふかも知れぬ。宿についたら天水があるだらうか、また昨夜のやうに鹽からい川水ではたまらないかと、そればかりが麻山軍曹の心配の種だつた。

「こゝらで小休止しよう。」
と麻山軍曹が振り向いて云へば

「分隊——止まれ！」
と上原一等兵が元氣さうな聲で分隊長の號令をまねた。しかしこの冗談に笑ふ者がない程一同は疲れ切つてゐた。上原一等兵の顔も妙にこはばつて口で笑つてゐながら目ばかりがすこく光つてゐた。

一同がある警備隊にたどりついて宿を興へられた時には日も暮れかゝつて午後八時を過ぎてゐた。いつものやうに内藤一等兵がまめまめしく一同の寢床の支度をしてゐた。腰を上げるさへ嫌になつてゐる一同はただ目先で「すまないな」といひながら彼の働きを見送つてゐた。警備隊の好意によ

る夕食がすんでしまふとすぐ寢床にもぐつて



しまつた。

「分隊長殿、分隊長殿……」 杉山上等兵が小聲でよんだ。

「何んだ杉山か、まだねないのか、早く寢な」と明日また疲れろぞ、

「え、だけど、上原の身體がもぢますかね」

「俺もそれを心配してゐるんだ。」

「行軍中に何故あんなにはしやいであるのでせうか。分隊長殿から少し注意してやつてくれませんか。」

「しかしね、俺には小言がいはないのだ。上原が無理をしてゐるのも、われ／＼よりも疲れ切つて身體が苦しいのもよく分るんだ。それでゐて上原がこの行軍で他の手足まとひにならぬため一番しつかりしてゐると思はせた。いばかりから元氣を出してゐることもよく分る。だから俺は上原が俺達の中で一番元氣だと思つてゐるふりをしてやりたいのだ。」

「あと三日行程で中隊に着けるといふのに、このまゝだとそれがもてまいと思ひますが。」

「上原の身體は中隊と一緒にいたい、われ

われに迷惑かけまいといふ精神力だけで保つてゐるのだ。それを下手に小言をいふと反つて參らせてしまふことにならぬかとそれを俺は心配してゐる。」

それからしばらく耳をすませて、上原一等兵のかすかな寢息を聞きとるやうに麻山軍曹と杉山上等兵は、ローソクの光で一入着い彼の顔のぞき込んでゐた。

「貴様泣いてゐるな、馬鹿だな早くねろ！」
麻山軍曹は杉山上等兵を叱りつけると、自分の涙をかくすやうにグルリ背を向けて藥の中にもぐつてしまつた。

その翌日は雨が降つてゐた。大した雨でもあつまいと一行は元氣よく出發した。なるほど雨の方が涼しくて樂ではあつたが、ぬれた路面がよく滑つた。みな前こごみになつて一歩々々力を入れて踏みしめて歩いて行つた。そのために歩度が少しも伸びなかつた。道路のそばに一軒家があつたので一同はそこに休んだ。上原一等兵も餘り口をきかなかつた。
「杉山、今日はここに宿らうか。」

と麻山軍曹は思ひ切つて言ひ出した。

「さうですね。この道では大して歩けないし敵が出て四人ゐれば何んとかなりませう。」

「分隊長殿、宿るんですつて、」

と上原一等兵が質ねた。

「未だ軍食前ですよ。歩きませう、上原は大丈夫です。夜行軍だつてしますよ。ねえ分隊長殿歩きませうよ。」

「何をいふのだ。もうこの俺が動けないのだよ。杉山、内藤、御苦労だが藥と薪をさがしてきてくれないか。お前はここにゐて俺の銃の手入れをたのむ。」

麻山軍曹は上原一等兵が朝から熱があつてだるい身體に雨をあびる苦痛と闘つてゐるのをよく知つてゐた。だから明日は附近の隊に連絡して軍醫の來診を乞ふつもりであつた。

麻山軍曹以下四名がやつとのことで懐しい中隊にたどりついたのはそれから五日目のことであつた。中隊でも待つてゐてくれた。彼等僅か四名でよく歸つてこられたと賞めてく

れた。

しかし彼等が夢に描いた中隊での楽しい生活は永くは續かなかつた。外でもない、上原一等兵が無理を通した長行軍に身も心も疲勞し切つて間もなく病床に呻吟しなければならなかつたからである。戦友たちがいろいろと心配してくれた。特に麻山軍曹、杉山上等兵は朝に夕に彼を見舞つた。また内藤一等兵は寢食を忘れて彼を看護した。こうした戦友たちの心配を他に彼は日一日と目に見へて衰弱して行つた。遂には軍醫も彼の再起を諦めるまでになつた。但し何うせ助からぬものならばと、入院させずにこれ程までに熟つた中隊の醫務室におくこととした。

ある朝いつものやうに麻山軍曹が醫務室で彼と話をしてゐた。

「何か欲しいものはないかね」

「有難う御座ります。別に何もありません。がただ一つ分隊長殿に質ねたいと考へてゐたことがあるのです。他でもありません。一體死んだ後には地獄とか極樂とかがあるものな



んにあるのでせうか、教へて下さい。」

「さうさねあるとも云へるし、ないとも云へようね。」

「やつぱりその位のものでせうかね。結局は分らないのかな……」

「うん、それ程熱心に聞くなら話す。但し俺一人で考へてゐるのだから間違ひかも知れないよ。やつぱり俺にも地獄極楽のあるなしは斷言出来ないさ、しかし俺は俺でこう信じてゐる。」

俺は子供の時から祖父さん子でね。両親よりも祖父と一緒に暮した方をよく憶へてゐる。随分と悪いことをしてお祖父さんを困ら

のでせうか。」
「そんなことを氣にするよりも、元氣を出して養生するんだ。軍醫殿も大分よくなつたらもう一息だといつておられたぞ」

「もう氣安めは止して下さい。地獄極楽がほ

せた。このお祖父さんが死ぬ前に俺を枕許に呼んだ。俺はまたお小言かと思つて温しく座り込んで祖父の言葉を待った。すると祖父はただ一言『もう坊の惡戯が見られないのが淋しいよ』と云つた。俺は隣近所から持ち込む

苦狀を詫びて廻るだけでも大變だつた位の祖父のことだから死ぬば後の苦勞がなくなるとでも云ふと思つてゐた。それをものつと俺から苦勞をさせられたい、惡戯が見られないのが淋しいと云はれた時には、子供心に泣いてしまった。祖父が死んでから後といふものは、俺の背後にはいつも祖父がゐて守つてくれるのだと信じてゐるのだ。今度の行軍も無事に中隊につけたのは祖父が守つてくれるからだと思つてゐる。それに阿彌陀さまの國に往けば、六神通を得て十方界にかへり、苦しんでゐる衆生を救ふと云はれてゐる通りお祖父さんは俺を救つてゐて下さるんだ。

だからお前だつて若しも死ねば、きつと極樂に往つて、懐しい中隊やわれ／＼のことを守つてくれるに違ひないよ。」

「さうですか、有難う御座りました。これで私もやつと安心して死んでゆけます。分隊長殿の御恩は決して忘れません。お身體に十分氣をつけて御奉公して下さい。」



葬儀・葬具のいろいろ

(問)

お葬式の時、四花はなを飾りますが、お釋迦

様が四木柱のところで死なれたから、その意味でせうか。

また火葬の時、いまづを使ひ土葬の時、くわを使ふのは式作法

なのですか。

またお葬式の時、鶴龜のついて居る葬具臺に赤い蠟燭を立て、火をつけないで、淨土宗でも眞宗でも飾るのは何う云ふ譯ですか、また佛様のお燈明が悪いから死ぬとか、或はお佛壇を新しく作ると人が死ぬとか云けのは何う云ふわけですか。

(青森・東津輕・平館・丸尾久一)

(答)

お釋迦様が涅槃に入られたのは、拔提河のはとり娑羅双樹と言つて娑羅の木と並木の間であります、その時娑羅の木々が眞白になつたと申します。それで

「鶴、龜、つる、いは、いとも言つたわけですが、

それをかたどつて白い紙で作つた四本の花を立てるのを「四花」と申します。

或はその娑羅双樹が半分白く變化したと云ふ説もあつて、それゆへに左右一對の四花を金色と銀色とに分けて作る場合もあるやうです。

次に火葬の時、いまづを使ふのは、火を棺につける爲に用ひたものが、段々作法にだけなつたのです。これは支那の禪宗でやつたのがだん／＼普遍化したもので、それが我が國へも傳はつたのです。また引導の言葉を「下炬」と申しますのも「火をつける」ことが主であるからです。

一體死體を葬るのに風、火、水、土の四種があつて、國を異にして風俗を異にして色々異なるのですが、(印度では風葬、佛教では釋尊が火葬されたやうに「火葬」を最も正しとし

擔當 中村 辨康

(質問 歡迎)

て居ます。然るに支那や日本は大體土葬ですが、佛教が來てから火葬が行はれ初めました。然し徳川時代までは全國的に見て土葬の方が多く、特殊に火葬ばかり行つて居た土地もありますが、土葬と火葬と併用されて居たか、或は土葬ばかりでした。

然し火葬場を「三昧」と云ひ後には墓地をも三昧と呼ばれるに至りましたが、かう云つた點から見ても佛教の葬式は火葬を主として居たことが判ると思ひます。それで、いまづを土葬の時に使ふのは何うも具合がわるいので、くわ又はすきを用ひることになつたので、無論日本の獨特のものであらうと思ひます。くわにしても、いまづにしても長さ二尺五寸を正すといいますが、今では短くなつたやうです。人の腕の長さが二尺五寸、たいまつ



徑一丈の圓を書きます。之れが太式です。

次に鶴龜のついた燭臺は葬式の時でなくとも、普通のお家の佛壇にも用ひられたもので

すが、何故に鶴龜を用ひたものか存じません。

鶴龜の燭臺に限らず燭臺に赤蠟燭や繪蠟燭を立て、火をつけないのは飾蠟燭と云つて、本

山のやうな大きな本堂の大燭臺には特別に作

らせた蠟燭でなくてはつり合ひが取れません。

それを平素ともしては金がかゝりますし

始終さうした特別の蠟燭を澤山注文して作ら

せて置かねばなりませんから、平素はそれよ

りも小さい燭臺に普通の賣品の蠟燭をとほ

し、大法要の時にのみ特別の大

蠟をとますのですが、普段は飾

りにしてあるから、それを赤く

したり繪をかいいたりしたのであ

ります。そのまねを小寺でも在

家でもしたのがお質ねの飾蠟燭

です。

次に燈明の善惡と云ふことは

よく存じません。また佛壇に限

らず佛具等を新しく作る場合お盆とかお彼岸

とか年回とか佛事に關係した時以外は「縁起

が悪い」とするのは、古代思想の「シャーマ

ニズム」の遺風であつて、血を忌み死人を忌

む思想からその關係のものを嫌つたまでのも

ので、そのことに依つて人が死ぬとか死なな

慰 靈 と 施 餓 鬼

(問)

私の妻は今春妊娠中急病で死去い

はしくないことばかり續きますので、苦し

い時の神だのみと申しますやうに、或る信

心者に見て貰ひましたところ、母親のおな

かの中に居た赤ん坊の靈のたいりだとの事

で、その怨靈をなくさめる爲に七日間のお

施餓鬼をして貰はなければいけないと申さ

れました。私共のやうな貧乏人には到底七

日間のお施餓鬼などと云ふことは出来ない

相談だと思ひますが、あの時母親だけの葬

式をして赤ん坊の葬式をしなかつたのは事

いとか云ふことは絶対にありません。それで

は佛壇屋や佛具店は始終人が死んで居なけれ

ばなりませんでせう。商賣は別であると言ふ

考へは許されません。ですからそれはただ

「忌」の思想から來た考へに過ぎないのであり

ます。

實ですが、赤ん坊は母親のおなかの中に居

たのですから、一緒に葬式されて居るわけ

だと思ひます。どうしたらよろしいでせう

か。御指導の程お願い申し上げます。

(東京・板橋・不安生)

(答) 御心配ごもつとも存じます。然

しながら靈がたいると云ふことは

ありません。何んなに不幸がおつゞきになり

ませうとも、それはさうあるべき因縁の然ら

しめたものであつて、或る特定の靈が働いた

ために不幸がつゞいたのでありませんし、眞

の佛教ではさう云ふことを認めて居りませ



ん。もし佛教家の中でそれらしく言ふものがあればそれは間違ひです。つまり封建思想がさう思はしめたのであります。無論謬見であります。謂ゆる一億一心であつて、假に悪靈があつてたいりをしようとしても他の多くの先祖以來の諸靈がよつてたかつてその悪靈を抑へつけて呉れない筈はありません。若しその諸靈が無力であり單に傍觀して居るだけならば、あなたは祖先以來の諸靈から見はなされて居ると云はねばなりません。さう云ふことはあり得ないのであります。凡ては和即ち僧伽でありますのは靈の世界だけが不和であつてよい筈はありません。

次に「施餓鬼」と云ふものは元來釋尊の御弟子たる「阿難」に依つて始められたと傳へられるもので『佛道修業の妨げを除く』即ち成就の爲の祈願であつたのです。則ち小量食を以て大量食乃至無量食となすの意念を養ふ

のであります。この「小」なるものが「無量」なるものになる即ち「阿彌陀」になるのは、現代的に云へば一個人のものが社會的に、國家的に、世界的に有效となるものと云ふことを意味して居りますから、學術、文藝、道德、宗教の如き精神文化若しくはその成果でなくてはなりません。宗教はその最たるものであります。だから施餓鬼することに依つて養はれ利他的理念が尊いのであつて、施餓鬼が單に施餓鬼行事だけに終つてしまつては効果は小であると云はねばなりません。だから七日間續けざまに施餓鬼法會をやれば怨靈のたたりが退散するなどは精神訓練以外には一寸意味が通りませんね。神祕的な効果あるらしく思はしめるところに米英的個人利得觀念を利

墓相と吉凶禍福

(問)

お尋ねいたします。實は私の家のお墓は猫足型の墓のついた石碑であります。ところが墓相をやかましく云ふ人

用するものがあるのではないでせうか。言つた人が何んな人か知りませんが、或る一人の人が言つたからとて一々それを信じた日にはたまつたものではありません。

萬卷の書を信ずれば書なきにしかずで、一々言はれたまゝに信じて行けば、しまいには收終がつかなくなつてしまふでせう。

然し残つて居る人の務めとしては赤ん坊の靈をも慰めて上げる心掛けは必要だと思ひます。それは必ずしも施餓鬼でなくともよろしいでせう。檀那寺へお頼みして御相談して見るのが一番よいと思ひます。また氣がすまないなら一回でも結構ですからお施餓鬼して貰つたらよいでせう。

があつて、猫足の墓は「よい事がなく」家が絶えたり不幸がつゞいたりするから取りかへなくてはいいないと申します。先祖代々の昔



からの墓を、さうした墓相學とやらから代へてよいものでせうか。私としてはかへたくはありませんが、言はれると嫌な氣持にもなります。どうしたらよいでせうか。御教へ下さいまし。

(東京・齋藤孝州)

(答)

墓相學と云ふものは墓相の統計から考案されたものとの話ですが、

僅かの墓を調べて偶然少しばかり數字が出来たからとて、仰山に「學」の字をくつつけて宣傳したのはおかしいと思ひます。元來一切の不幸吉凶禍福は「縁起」の理に依るもので、單なる一因だけで決定するものではありません。だから墓の格好が何うとかかうとか云ふことで幸不幸のあるはずはないのですが、たまたま若干の統計に不幸の結果が出たとすれば、それは一事が萬事でひとり墓ばかりでなく、生活の一切が警澤であり奇を好み異をてらつた結果、遂にその家をして没落の淵に陥入れたの

ではないかと思ひます。之れに反してたとへ

墓相が何んなであらうとも別段氣にするやうな事が起らない場合も澤山あるわけですが、それは他の「不幸を導く原因」がなかつたからです。随つて墓の形を改めたからと云つて

不幸が一邊に幸福に轉ずるわけではなく、生活を純化する一つの現はれとしてそれが墓にまで及ぶのが自然の行きかたでありませう。

お墓は四輪が正しいのですが、いつのまにか空輪と地輪とを一つにした現在の形になつたのです。猫足臺のものは屋根のついて居る

のが定式で、將軍さまと

か諸大名及びそれらの奥方さまのお墓はみなさう

云ふ形になつて居りま

す。民間でもその形をま

ねるものもあり、その形

から屋根を遠慮して猫足

臺だけをつけたものもあ

るわけであります。だか

ら猫足臺が悪いと云ふの

膽力強化

小心恐怖症

矯正 新法 説明 呈送

は警澤と云ふ以外に理由はないと思ひます。ことに先祖からさうなつて居るならばそれをわざ／＼作りかへるなどは不都合でありむだなお金を使ふことであつて時局を認識しないものです。そんなことよりもつと根本的な心を何うあらためたらよいかと云ふことが刻下の急務でありませう。即ち私達の心の中樞に巢喰ふて居る米英の經濟第一主義の自由自我思想を伏滅せしめなくてはなりません。どうか一日も早くその方の御修養にこそしまれ



◇小心恐怖症◇毒親症◇毒恥症◇内氣性◇おくびやう癖等にわがまをいさされてく心配し◇無闇に人を恐れ◇物事に大膽さがない◇少しいの事にあつてもくもく目上の人を恐れる等の人は早く其惡癖を直さなければいづるべきである◇學科が出來ても試験場や他人との應對に失敗し大失敗を演じいつまで経つても成功の第一歩に堂々と乗り出す事が出來ないかやうな人も短時間で大膽明となつてほしい◇他人に打ち勝つ度胸がハガキ申込次第「内容説明書」無代進呈す

申込所

東京市瀧野川區西ヶ原町三四六

瑞穂社研究所

浄土漫画

北・内地・南

制作・漫画協団



上手 和田かつぢ

熱いの寒いのつて
文句は云ひませんよ、
南北の兵隊さん
を想へばネ



米の船不足

「アレツ太陽が出たら
落けやがる、氷船
ぢやないか」

(川久日)



一言もなし 和田かつぢ

「アリューシヤンからマダガスカルと無敵
海軍は二萬キロも及んでゐるのに、お前
は二十センチも出来てないぢやないか」

多忙の
宣傳班員

山崎善一

オリー
戦車
分捕つ
たから
日の丸
描いてくれ



よし
きた



オリー
飛行機分捕
つたから
こつ
ちも
頼む



よし
きた



收穫の秋

和田かつぢ

「オーイ集まれ、またも大戦果發表だ！」



寒暑問答

「オイこの位の暑さはなんだ。北の戦友を思へ」

「ウン北でもこつちを思つてハリキツテルサ」

(川口久)



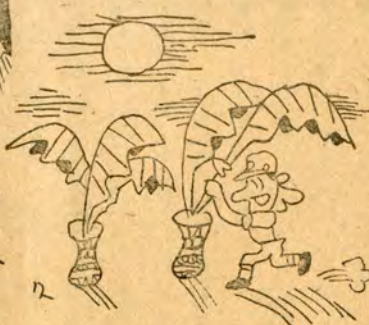
アリユーシヤン
便り 山崎善一
「残暑でうだつてゐる内地へ雪だるまの寫眞を送つて涼しくしてやらうぜ」



南方の中秋

川口久

「椰子のはっぱのすゝきでござる」



オーイ

宣撫の

ポスター

描いて

くれ

よしきた

オイあわてな

宣撫の

ポスターだぜ

ホイしまつた

淨土隣組座談會

法を活かす人

乙郎 危篤の病床にある人が特例を以て従軍記章と勳八等旭日章の傳達を受け、無上の皇恩に感泣し勳章を胸に抱きながら逝去したといふ話があります。ほんとに有難いことです。

座長 それは逗子町に住む柿沼長沼氏のことです。弟の康治氏が餘命いくばくもない兄を見ながらせめて従軍記章だけでも拜受出来たら何んなにか死んでゆく兄が喜ぶだらうかと考へました。そこで無理を承知で隊の方にお願ひしたところ意外にも勳章まで一緒に早速傳達されたといふわけです。



甲雄 兄弟とも歸還勇士なんです。便宜交付の恩典は容易にないことですが、この温情溢れる處置には御兩人ばかりでなくわれわれとても感激してゐます。

座長 東條陸相はこの處置は

陛下の御恩召を體し、適切親切に事務を處置したものである。法といふものは結局死物であつて、法を活かす妙はこれを運用する人にあるのであるといつて、石井部隊長以下關係者を表彰しました。

丁造 皇恩の無窮、皇軍の温情は云ふまでもないが、この法を活したお取扱ひは以てわれわれの範とすべきですわい。よく世間には道に實情を輕んじて形式を大事がる者があり勝ちぢやから。

丙子 電車や列車に乗ると空席があるのに腰かけない學生が、ありますわね。

戊戌 それは又何うして腰かけぬ

ですの。それだけ餘けいに混雑しますのに。

乙郎 それは「學生は立て」といふビラがはつてあるからでせう。

座長 いくらビラがあつても、空席に腰かけていけないといふ意味ではないでせう。その邊に學校教育の不徹底があります。

丁造 全くぢや、わしが子供をつれてゆくの親だけ腰かけて子供を立てさせておけるぢやらうか。

甲雄 すべて實情にそくしないものはなんの役にも立ちません。

丙子 口より實行といふわけね。妾もお饒舌り中止だわ。

口達者な米英

乙郎 ソ聯を助ける米英の第二戦線の結成も口ばかりのやうですわね
座長 あれはただの空約束といふよりもつと米英の惡辣さがかくさ



れてゐます。つまり明春になつたら約束の第二戦線を結成してやらうといふのですが、その前に多がきてしまひますからね。即ちソ聯が獨軍に負けるなら獨りでさつさと負けてしまへ、若し冬まで持ちこたへられたら手助けしてやらう

といふわけで、ソ聯を犠牲にしても自分が樂をしたい手なのです。戊枝 ソ聯が怒るわけね。

丁造 ソ聯ばかりでない、英國をたのみにしてゐた國々が全部この手でやられてゐるのぢや。

甲雄 大型飛行艇を五千臺造つて

一日に五十萬の兵力を米國から英國に運ぶ計畫を考へてゐるさうですね。考へるだけなら何でも出来るが、よくもこんな法螺が吹けるな。

乙郎 千六百億といふ大豫算のうちで今までに實際に使用した額は僅か三百億しかない。つまり初めの計畫の二割しか實現出来てゐないことになりまふ。こんな具合で百八十億ドルの武器貸與法案は二十六億ドルしか費つてゐません。米國は景氣のよい夢物語

りが好きなんぢやう。

甲雄 米國は今後一千萬人の陸軍と三十萬人の航空隊、三百萬の地上部隊を準備するのださうだが、この準備をするのに國民の決意がまだ出来てゐないと白狀してゐる所がおかしいぢやないですか。

座長 たしかに法螺が好きなのであらうが、矢張りそこに米國の弱點があるのです。こうして何十倍にも大きく云はなければ國民がついて來ない。戦争目的のはつきりしない職さをするため國民を括めて引つばつてゆくのに國民を驚ろかす必要があるのだと思つてゐます。

丁造 國民精神の闇取引ぢやね。

座長 何しろ一般には「ルーズベルトの戦争」といつてゐるとか、

これでは米兵に戦意のないのも當然です。俘虜の一人が「何れにせ

よ戦争は早く終つた方がよい」と

誰が戦争してゐるのか判らないやうなことを云つてゐました。ハル國務長官が、今まで自分の國の利益ばかり考へて戦備を怠つたのが敗けた原因だと嘆いたり、生活と生命すら犠牲にする覺悟をしなくてははいけないとか、判り切つてゐることを國內に云つて廻つてゐる姿は氣の毒みたいなのです。

丁造 やれ／＼皇國に生をうけたものの幸せは外國の話を聞いてますますはつきりますわい。

乙郎 ボルネオの華僑が皇軍に三百萬圓を獻納しましたね。彼等にも段々と皇恩が判つてきた證據です。

女性と勤勞

戊枝 まへの歐洲大戦でドイツでは女がみな勞働したのですが、

近頃バスの車掌に男がなつてゐますね。何んだか逆のやうな氣がして……

丙子 だけど女

だつて工場や會社に随分澤山勤めてゐますわ。

戊戌 事務のやうなもので女で

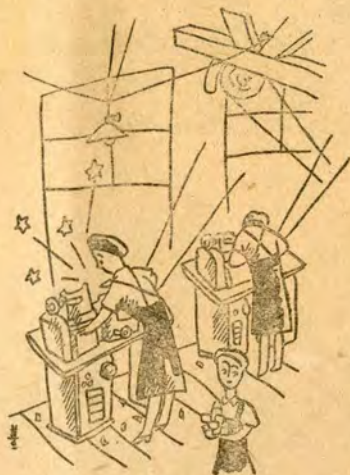
出来ることはなるべく女がした方がよいでせうね。

丁造 家庭の婦人も仕事が増して御苦勞だと思つてゐるが、一般の婦人に微用が今のところ少しもないのは、それだけまだ餘裕があるからぢやらうね。

丙子 たしかに今働いてゐる方々は獨身が殆んどですわ。

座長 英國では十六歳から四十一

歳までの女が全部登録されて微用を待つてゐるさうです。働く所は兵營と國防團と軍需工場とがある



とのことで、當然家庭の主婦が多

數含まれてゐます。但し獨身の女

は遠い工場に移し、家庭を持つ女

には近くの工場で働かせるさうで

す。勞働相の説明によると、この

まゝ事態が推移するならば一切の

生産力は低下する一方であり、戦

争に勝つどころか逆に英國はひと

りでに亡びて行く外はない。だか

ら婦人の微用を強化したので、もう婦人なるが故にお手やはらかにやつてゐられないのだといつてゐ

ます。丁度前大戰の末期頃と同じ

苦境に追ひ込まれてゐることにな

ります。人口問題は英國の致命傷

となりさうです。

甲雄 昔は一城の主が亡びるとき

は、そこにゐた女も子供も全部目

害するか討死したものだから、必

要があれば日本の婦人だつてとも

に倒れるまで働く覺悟があるに違

ひありません。

丙子 それはやりますわ。

戊戌 防空には男の方だつて勿論

活躍なさいますが、妾達は内心で

女だけでも必ず消しとめると決心

してゐます。女だつて滅私御奉公

の精神は同じですよ。

乙郎 いや、よく判りました。

丙子 矢張り今まで女は大切に甘

やかされてゐた點はありましたわね。しかし今の女性は大丈夫だわ。

軍神加藤少將

丁造 軍神加藤少將のやうに二階級を特別進級せしめるの恩命を拜

したものは陸軍では初めてのこと

ぢやが名譽この上なしですわい。

甲雄 何しろ感狀を七度も戴いて

ゐるなんて空前にして絶後のこと

です。ほんとに偉い方です。

乙郎 支那事變から大東亞戰爭を

通じて加藤部隊が撃破した敵機が

實に二百六十八にのぼる大戰果な

のだから大したものですよ。重大な

任務を帯びた時に、ただ實行ある

のみ、といつて何んな苦勞も敢て

辭さなかつたとか。疲勞その極に

達したため部下には全部休養させ

ながら自分だけは僅か三時間位の

睡眠の後にすぐ飛び立つて行つた



とか、まさに鬼神を泣かすとは軍神のことです。

座長 軍神のたてられた戦果は申すまでもないが、なんといつても軍神の人格に頭が下ります。日本武士は腕が強いばかりでなくすぐれた人格の持ち主でなくてははいけません。

丙子 お風呂に一番あとから入って平然と満足してをられたんですつてね。そして夜半にスヤスヤ寝てゐる兵隊を見廻つて、手や足が

けね。ほんとの肉親だつてかなはない位ですもの。

甲雄 軍神の言葉にこんなのがあります。部下が一機でも缺けると涙が出て仕方がない。基地に歸つても敵を撃滅した喜びはなくなつてしまふ。眞實に憂鬱である。

丁造 血も涙もある親鸞ぢや。それでゐて敵の操縦士が勇敢であつたといふて、後で花輪を投下してやつたといふから、古武士の面目そのものですわい。

蚊帳から出てゐるとそれを一々中に入れてやつてをられたなんて随分慈愛深い方ですわね。

戊枝 軍神の部下の方はほんとに幸せだつたわ

座長 細心にして大膽、冷靜にして勇敢、慧敏にして沈着といふすべての人格が一つにおさまつてゐて日本男児の典型といふより外に言葉もありません。

丁造 われわれにはその片方だけでも眞似出来んのにな。

丙子 空中勤務者の髪を全部本部に集めてあつたさうですわ。

座長 全員髪だけが故郷に歸るといふ決意なんです。死んで部下の英靈に逢ふ氣持はまつたく尊いものです。

乙郎 あの戦ひが航空戦に一段落をつけた時だといふのですから、まさに死場所を得たといふものでせう。軍神の嚴父も金鷄勳章に輝く武勳者なので父子二代のはまれといふわけです。

座長 ここに軍神を讀へた佐藤春夫先生の歌があります。

朝夕のあかねぐも、あかき心をつくしては、そらみつやまとましひの、はためく神と身をなしつつ、マレースマトラジャバビルマ、南の空をしたがへつ、遂には印度洋上の、波間の花と散りぬとや。

み空に生きて空に死ぬ、軍神のいさをしを、よろづよかけて國民は、み空を仰ぎたたへなむ。

ただ一群の隼は、君を親とし慕ひしが、けふより後はわたつ海を君が墓となぐくらむ。

うべ神なればおほ空に、はたわたり海にみなぎりて、君がころはくましと、諸人知るや知らざるや。

甲雄 ソロン海戦に大戦果があがりました。すばらしいですね。

一同 皇軍萬歳、萬歳！

(山崎書一監・編輯部記)

俳壇

太田耳動子選



岩國市 長岡 白朝
腕時計止まりてをりし夜振かな
評 中七字により相當夜の更け
てゐることを思はせる

和歌山市 北垣 政雄
出水の河岸にたゞよふ金魚かな
評 流れに抗しかねてゐる金魚
それに依つて出水の早さの程
も察せられる

京都市 福島孝治郎
七夕の笹もたはしの集ひかな
評 中七字により相當賑かに華
かな様子うかがはれる

福井縣 酒井 茂
會下寺に助講となりて結夏かな
京都市 近藤 青牛

日曜の小使夫婦毛虫驚く
大阪市 森 正義

巨いたる瀟のうねりや麥の秋
滿洲國淺野縣 鶴岡 慈禮
銃聲のこだまのなき夏夜かな
松江市 根本 和民

妻寝せる妻の足うらのよけれかな
奈良 五葉 念香
妻寝して一代果報の男かな
茨城 眞木謙太郎

落梅の音靜かなり草の闇
鮮 中村 茂舞
洗髪はらりと顔に夏の月
滋賀 重野ふみ子

梅雨の日は木魚の音がしみにけり
今治市 三木 光子
不機嫌な酷暑の夫にさからはじ
東京 白石柳風子

夕立に叩かれ出でし蛙かな
名古屋 堀場 典雄
納涼の頃より熱のひく身にて
東京 三野輪幸節

つゝじ咲く湖畔を蔽ふ山ありて
北海道 花田 順往
この上は残暑きびしきこと願ふ
吉野 上野 恭雲

子兎の元氣にそだつ若葉かな
東京 丸山勘四郎
回收の眞鍮まぶしき夕焼かな
東京府 船津 思露

夏の月白光微塵に征く鯉は
東京府 萩原 通孝
病窓に炎ゆる向日葵恐れけり
立川市 田邊 春人

遠く近ちの蟬の時や風にのり
北海道 前野 賢一
緑村の靜かに明けて時鳥
香川縣 日向 法圓

手枕のしびれ重たし涼み台
宮城縣 菅野 仁廣
そよ風に青田のなびくばかりなる
開原街 八木 茂

梅雨晴れの緑一色に澄み渡る
栃木縣 大輪 清
朝顔の蔓さしのぶる御興渡御
滿洲國淺野縣 鶴岡 慈禮

妻寝せる苦力の足に陽がとまる
東京府 船津 定祐
晝顔に馬頭觀音懸けたり
兵庫縣 水谷 良子

向日葵の朝日をやゝにうつむける
廣島市外 山口 勇治

點々と濱の灯や土用浪
名古屋 熊澤 秀國
朝顔の蕾の下野天風呂
小樽市 平井 正念

胃からすぐ噴き出る汗の暑さかな
豊島區 波邊 一念
古りし門梅雨の松にさへらる
滋賀縣 田中 露山

月を脊に青田の前の涼みかな
土佐 横山 亮國
注連張りし杉の古木や岩清水
富山市 新田 愛染

笹に聞く雨靜かなる夏座敷
兵庫縣 山本多可女
梅雨の風に濡れつゝ浪を見たりけり

早口競争
三通早口で云つてみて下さい。
この小窓の下に釘引きにくい釘
だ。

投稿規定
官製はがき一回二句以
内とし住所氏名明記
壇係あてに送ること

○この客はよく柿食ふ客だ。
○長持の上に生麥生米生卵。



法語
解説

無量壽、こそ最高價值

法然上人法語（その九）

中村 辨 康

法語

抑も阿彌陀佛の内證外用の功德は無量無變なるも、要をとるに名號の功德にしかず。この故に即ち彼の阿彌陀佛特に名號を以て衆生を濟度し給ふ。釋迦大師もまた多く彼の佛の名號を讚歎して未來に流通し給へり。

今また彼の名號に就て其の利益を讚歎せん。阿彌陀とは是れ梵語なり。こゝに翻じて無量壽といひ、また無量光と云ひ、また無邊光、無礙光、無對光、焰王光、清淨光、歡喜光、智慧光、不斷光、難思光、無稱光、超日月光と云ふ。こゝに知る。名號の中には光明と壽命との二義を具へたる事を。かの阿彌陀佛の一切の徳の中には壽命を本となし、而して光明すぐれたるが故なり。（三七、

三八、三九、四〇、四一、四二省略）

凡そ諸佛の功德は則ち一々にみな法界に遍しといへども、然れども、餘の功德は遍法界の相尙ほ顯然ならず、ただ光明のみありてその理分明なり。故に諸の功德の中には光明を以て勝れたりとす。

また諸佛の中に彌陀如來の光明最も勝れたり。この故に教主釋尊讚じて曰く、無量壽佛の威神光明は最尊第一にして諸佛の光明及ぶ能はざるところなりと。又いふ。われ無量壽佛の光明威神の巍々殊妙なることを説かに晝夜一劫すともなほ未だ盡すこと能はじと。これは是れ彼の佛の光明と餘佛の光明と相對してその勝劣を校量したるなり。

凡そ佛の功德を論するに乃ち能持所持の義あり。謂は

解 說

「名體不離」と云ふ言葉があります、それは獨り阿彌陀様のことばかりでなく、すべてに通ずるものであります。

く壽命を以て即ち能持とし、餘の諸の功德をみな所持とす。一切の萬德はみな悉く壽命に持せらるゝが故なり。何となれば若し壽命なくば、相好、光明、說法、利生及び諸の莊嚴一切の功德何によりてか住せん。これに據りて之を観るに、獨りただ壽命無量の一願、自餘の諸願を攝持す。大悲の善巧またこの願に顯はるゝなり。抑も彌陀如來の壽命無量の願を發したまひしは、己が身を愛惜して長壽の果報を求めたまふにはあらず。ただこれ濟度利生の方便にして、また衆生をして欣求の心を發さしめんがためなり。一切の衆生みな壽命の長遠を願ふが故なればなり。阿彌陀を願じて無量壽といふ良に所以あり。また法華經の如きは釋迦如來の久遠實成の旨を顯はすを以て殊勝甚深の義となす。これを以て彼の二十八品の中には壽量品を以て衆勝とす。故に知る、諸佛の功德たゞ壽命を以て第一の功德となすことを。

(法語抄三五) 四五「逆修說法」元漢文

茶碗と云ふ名と茶碗の體とは決して離れて居るものではありません。飛行機と云へば飛行機が思はれ、軍艦と云へば軍艦が思はれるやうに、ものの名は直ちにそのものを思はせます。随つてものの名はそのものの内容や外形を總轄して居るわけでありす。この故に内容を豊富に持つものほど、その功德は大なりと言はねばなりません。量とか障子とか云ふものよりも「部屋」の方が總轄的ですし、家の方が更に總轄的であります。それを段々廣め高めて見ますと「天地」とか「大宇宙」とか言ふことはが一番廣く大きく總轄されたものになります。

いま阿彌陀佛は無量と云ふ顯名が示すやうに一切を含んで居りますから、宇宙大的人格表現としてはこれ以上のものはありません。しかも無量壽、無量光の内容を持つて居ることが、そのまゝ名に示されて居るから、まことに阿彌陀佛の名號の功德は實に廣大であります。

阿彌陀佛の内證外用の功德は「選擇集」本願章には四智三身十力四無畏等の一切の内證の功德と相好光明說法利生等の一切の外用の功德はみな悉く阿彌陀佛名號の中に攝在す。故に名號の功德最も勝るとなす。餘行は然らず。各一隅を守る。是れを以て劣るとなす。

これ即ち教化にあたつて全分の力を發揮し得るもので、四智の中の妙觀察智の内容を説明したものと言つていへないこともないと思ひます。

また「四無畏」とは等覺無畏（正覺を得て居るから他の批難にあつても畏れがない）漏盡無畏（永く煩惱を滅盡して居るから諸の難にあつても畏れない）障法無畏（非難を説明して他をよく納得せしめる）説出道無畏（出離の道を説くに當つて他のさまたげを屈服せしめる）即ち道を説くこと自在なるを示したものでありますが、此の十力と四無畏とは三念住と大悲を加へて佛の『十八不共法』と稱せられるものであります。「三念住」と云ふのは

一、自分に對して相手方が尊敬して居る場合、

二、その反對の場合、

三、その一と二とが入り交じつて居る場合、

の三境に對して心が安住して毫もそれらの毀譽褒貶に動かされないものであります。また「大悲」は佛心の根本で今更説明を要しないでありませう。そして「不共」とは佛にのみ限られたことで、つまり獨特と云ふ意味であります。このやうに「四智、三身、十力、四無畏、十八不共法」に内證即ち佛自ら證得されたる精神的な功德と云はれるもので

あり、これを基として外に現はれる働きが、相好、光明、説法、利生等の外形的功德となるのであります。

その「相好」とは相と好とであつて、普通には三十二大人相とそれに付隨する八十隨形好とを申します。

然し阿彌陀佛の相好は觀無量壽經に説かれてあるやうに八萬四千の相の一一に各々八萬四千即ち七十億五千六百萬の隨形好があると云ふのですから、かうなると最早人間の的なものではなく、宇宙大のものとも考へなければならぬのでありますし、また「光明」は謂ゆる無量無邊であつて是れまた宇宙大のものであります。この故にそれに依つて表はれる「説法」もその結果たる「利生」も悉く全法界的なものではあります。それらが悉く「阿彌陀佛」の名の中に包含されて居るわけであります。

然しこの御法語には、これら名號の功德の中から特に無量壽と無量光との二義を取り出して讃嘆して居られるのであります。即ち「四智三身十力四無畏」等の功德は「遍法界」の點に於てハツキリしがたいうらみがあります。獨り光明はその中心からズツと周圍へひろがつて行くからその遍法界のすがたが明瞭であつて何の説明が加へられずともよく想像ができます。ことに無量壽經には十二光が舉

げられて居りまして一層その遍法界なることが明らかに
つて居ります。法然上人はこの「逆修說法」の中に十二光
の説明をなさつて居られますが、それは無量光、無邊光、
無碍光、清淨光、歡喜光、智慧光の六光を擧げて「要をと
るにこれにあり」とその他の六光を略して居られます。即
ち無量光は阿彌陀佛の光明の本體であり、無邊光はその相
であり、無碍光はその働きであります。また清淨光は私達
の財貪淫貪の二貪を消除して心を清淨ならしめ、歡喜光は
私達の瞋恚の心を轉じて常に歡喜を感じしめ、智慧光は私
達の愚癡を明らかにして眞實の智慧にめざましむる働きを
なすものだと居ります。つまり私達の拙い心の根本的
なる貪瞋痴の三を解消して意と情と智とを眞實なるものに
向上せしむる働きを示されたのであります。

かくの如く阿彌陀佛の光明は殊妙であり威神巍巍として
他と比較するものなく誠に絶大であり絶妙であります。此
の故に無量壽經には「最尊第一にして諸佛の光明及ぶこと
能はず」と説かれたのであります。

然しながらその勝れたる光明も壽命長遠の廣大なるに比
することは出来ません。謂ゆる能持、所持の二義に配すれ
ば、壽命は能持であり、その他の功德は所持であつて、つ

まり「命あつての物種」と云ふ諺の通り壽命なくしては
何んなによいことでも價值は低減するからであります。

阿彌陀佛のいろいろの功德の中で、特に「壽命」の無量
と云ふことに着眼され、無量壽こそ價值の最高なるものと
見極められたのはさすがに法然上人でした。淨土教の大成
者と云はれる善導大師は宗教的天才であつて、あんな立派
な人が何うして支那大陸に産出したか不思議な程に思はれ
るのですが、その不出世の宗教的天才にして「壽命」の眞
實な意義を見出し得ず、ひたすらに「光明」を讃嘆するこ
とに熱心でした。六時禮讃に見る善導大師は宗教的詩人で
あり詠嘆者であり感情家であります。由來信仰篤き者はさ
うした感情にするどいところの感激家で、ともすれば質實
的な生命觀が第二義的になり勝なものであります。

然るに我が法然上人は全く異つた性格をもつて居られま
した。即ち世界無比なる日本國體に養はれた天才だからで
あります。法然上人は善導大師に依つて阿彌陀佛への信仰
を導かれたので「徧依善導」と云つては居られますが、善
導大師よりも一頭地をぬいて最高の「生命觀」の上に立ち、
無量光よりも「無量壽」こそ最も高い價值標準でなければ
ならぬとの見地から、阿彌陀佛の四十八願中「壽命無量」

の願こそ一切を攝持するものとの裁斷が下されたのであり、大悲の善巧はこの願に依て顯現されると言はれたのであります。

無論「無量壽」の中には、自分の身を愛惜して長壽の果報を求むると云ふやうな考へのある筈はありません。短命なればこそ長壽が望まれ自身への愛惜もある筈ですが、永遠の中にことさら長壽を望むことのあるべき譯がありません。それはたゞ衆生への大悲の爲の表現に過ぎないのであり、且つ正しき天地の理法に隨順することが「正中の正」なるものであり、正中の正なるものを壽命長遠たるものであることを物語るものであります。

因位法藏菩薩が「阿彌陀」を體現すべく立願した時、それは決して自利的な要求からであらう筈はありません。さればその誓願はまた衆生の成佛を要求して居るものではなく、往生をこそ望んで居るのであります。諸人の成佛を望むのは個人的主智的教化であつて、もとより正しい國體思想に合致する教化法式ではありません。それは畢竟群雄割據的となり封建的となるべきものであります。そしてそれは完全な無量壽ではあり得ないのであります。つまり佛はみな無量壽と云ふ徳性を具有するけれども、その出現様式

が個人的要求から出發するものなるが故にやがて滅度を示現せざるを得ないのであります。「賢劫七佛」とか「番々出世」とか云ふ思想はみなそれであります。此の點になると阿彌陀佛は國土を中心として居て十方衆生の個人的成佛を求めて居りません。國土の中に於いて衆生をして各々その塔に安んじその處を得せしめるものであります。即ち凡てを阿彌陀佛に歸一せしむるのであつて、衆生をして我れ成佛せりとなし、各々一隅に自立せしめるやうな霸道を許さないものであります。即ち何處までも往生主義であるところに謙虛な素直さを示して居るのであります。それをしかも「往生即成佛」と言ふのは行きすぎであります。然し成佛と云ふことを聖道門流に解釋しないならば格別ですが、若し聖道門に云ふのと等しい意味であるならば、それは個人主義に墮してしまつたもので、折角の國土中心主義が歪曲されてしまふのであります。茲に淨土宗以後の鎌倉期に發生した諸宗派の行きすぎがあるわけであります。即ち霸道時代の思潮に押し流された爲でもありません。かゝる點からも我が法然上人の宗教觀が如何に傑出して居るものかわかるわけで、私達も此の點また大いに喜ばずには居られないのであります。

編輯後記

◇今まで子供には「偉くなれよ、偉くなれ」と教へてきましたが、それなら何うなることが偉いのかはつきりしない所がありました。

◇社会的に著名になるか、うんと金儲けをするか、權力のある地位につくか、その何れもなるほど悪くないことに相異なるが、こういうふ者になることだけを目標に進むのはほんとに偉い人になる道ではありません。

◇殊に個人の利得を第一にしてはならぬ現在に於ては、尚更のこと英雄をこゝとするよりは己れの職場にこれこそ天職であるといふ考へを持つことが必要でせう。

◇軍神加藤少将は航空指揮官として抜群の功績をあげただけの手腕を持つてゐたこと勿論ですが、さらに圓滑なる人格と崇高なる品性とをもつてをられました。

◇如何に學識が深くても、それだけでは偉い人になれません。人格の陶冶こそ根本をなすものです。日夜たゆまぬ修行を重ねることこそわれわれの一生を通じての仕事でせう。

◇軍神は一日にして生れたものではありません。

◇大東亜の盟主として、われわれは仙を指導するの立場にあります。少なくとも東亜諸國からわれわれは注視的となつてゐます。従つてわれわれの日常が直ちに仙に頼るを示すものだと自負と覺悟をもつて生活しなければなりません。

◇舊秩序の諸國は日に日に衰落の運命を辿つてゐます。他國や他國の民族を犠牲にして自分たちの繁榮を維持してきた彼等ですから、類然として廢れてゆくのも當然と云へませう。

◇しかし過去に於て彼等が築き上げた、蓄積してきた力は決して侮ることは出来ません。これを完全に覆滅するまでにはなほ相當の長年月を要することも亦止むを得ません。だがわれわれは如何に長くかゝらうとも新秩序を建設し終る最後までがんびり通す決心が出来てゐます。

◇以前は日本人は氣が短いもの、一時的に興奮するが永續しがしないものとの定評がありました。しかしこれが幸ひにも間違であつたことを實證しつゝあります。

◇第一次歐州大戰で瀕國が經濟上と思想上からみずみず敗けてしまつた古い經驗は何の國でもよく知つてゐます。われわれとても油斷は禁物です。尚一層の奮勵を誓ひませう。

◇吉田敏二郎先生から捐も愛らぬ御指導をいただき感謝致します。

◇聖典義義は大野浩昭先生の御都合により今回だけ休載いたしました。御諒下下さい。(科題)

淨土 九月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和七年八月三日印刷
昭和七年九月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園十五號印刷會社

編輯人 眞野正順

東京市芝區芝公園十五號印刷會社

印刷人 赤尾光雄

東京市牛込區西町七(會社)

印刷所 大日本印刷株式會社

配給所 東京市牛込區西町二ノ九

日本出版印刷株式會社

發行所 法政上八課御金

東京市芝區芝公園十五號印刷會社

御領事 京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價參金十二錢

(發售一冊)

會費 金一圓五十錢
(發售五冊)

腦の病・神經系統諸症・神經痛
腦溢血・鼻・耳の病・不眠症
綜合的優秀藥

光明丸

主治効能

腦神經系統諸病、神經病、腦神經衰弱、不眠症、
てんかん、腦膜炎、ヒステリー、小麻痺(ヒキ)、兒麻痺(ツケ)、腦
梅毒、梅毒、腦溢血、半身不隨、心悸亢進症、
逆上、耳鳴、腦貧血、頭痛、鬱血、(肩首コリ)
神經性(耳病)、神經性(鼻病)、記憶力減退、
思考力減退、精力減退、健忘症、性的神經病一
切、神經性變屈症、小心恐怖症、恐迫觀念、憂
鬱症、誇大妄想、取越苦勞、雜念妄想、多夢症
胃腸障害、便秘症、神經痛、ロイマチス、關節
炎、以上ノ諸病ニ用ヒテ著効アリ

價	藥
冊	六
日	日
分	分
七	貳
圓	圓

全國有名藥
店・一流百
貨店ニアリ
品切ノ節ハ
直接本舖へ
御注文下サ
イ

試供藥と
説明書を

進呈

京都伏見いなり山
謹製領藥元 願 成 閣

關西代理店 大阪 合資會社丹平商會分店
關東代理店 東京 株式會社丹平商會支店

昭和十五年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十七年八月廿日印刷刷本、昭和十七年九月一日發行

淨 土 第八卷 第九號

定價金十二錢(送料)
外埠定價金十三錢